**春日の神の御ことわり**　皇后は必ず藤氏から立つべき由の春日明神の神託。少女卷にも「源氏のうちしきり后に居給はむこと世の人許し聞えず」とあつた。

**いと時めき**　大君が春宮の寵を得て。

**斯かる御まじらひの**　大君がかうした宮中生活にお馴れにならない間は、しつかりした御後見がなくては困るだらうといふので。

**殿はつれづれなる**　眞木柱が大君に附添つて共々宮中に參られたので、邸内は淋しくなつたやうな氣がして。

**東の姫君**　螢兵部卿宮の御女で宮の御方といふ。

**よろづの御こと習ひ**　大君や中君が宮の御方からさまざまの事を習ひ。

**かたはなるまで**　見苦しい程恥かしがられるけれども、性質は引込思案ではなく。

御さまなり」と宣ひながら、まづ春宮の御事をいそぎ給ひて、（大君を春宮に奉る準備をされて）春日の神の御ことわりも、（皇后は必ず藤氏から立つといふ春日明神の神託が自分の代に實現して）わが世にやもし出で來て、故おとど（大納言の父致仕大臣）の、院（冷泉院）の女御（弘徽殿）の御事を、胸痛くおぼして（秋好中宮におされて立后のなかつた事）やみにし慰めのこともあらなむ、と心のうちに祈りて、參らせ奉り給ひつ（う）。（大君を春宮に）いと時めき給ふよし人々聞ゆ。斯かる御まじらひの馴れ給はぬ程に、はかばかしき御後見なくてはいかがとて、北の方添ひてさぶらひ（はイ）給ふは、（大君の繼母眞木柱が大君に附添つて宮中に）誠に限りもなく思ひかしづき（大君を）後見聞え給ふ。

殿はつれづれなる心地して、西の御方は一つにならひ給ひて、（中君は大君と一緒にゐた癖がついてゐるから）いとさうざうしう（く）ながめ給ふ。東（ひんがし）の姫君も、うとうとしくかたみにもてなし給はで、（宮の御方も大君や中君とお互に疎遠にはなさらずに）夜々（よるよる）は一所（ひとところ）に御殿（大）ごもり、よろづの御こ（に）と習ひ、はかなき御遊びわざをも、こなたを（宮の御方を）師（なじ）のやうに思ひ聞えてぞ誰も習ひ遊び給ひける。物恥ぢを（宮の御方は）世の常ならずし給ひて（う）、母北（眞木柱）の方にだに、さやかにはをさをさ（はつきりと向ひあひには坐られない）さし向ひ奉り給はず、かたはなるまでもてなし給ふものから、心ばへけはひの埋（うも）れたる



**うち參り**　大君を春宮に入内せしめた事。

**さるべからむさまに**　紅梅が以前眞木柱に言うた詞。宮の御方の身の上を然るべきやうにきめて仰しやつて下さい。實子と同樣にお世話しませう。

**更にさやうの**　前に「物恥ぢを世の常ならずし給ひて」とあつた。あの人は、さうした結婚といふやうな事はまるで考へてゐない樣子ですから、なまなかな事は却つてお氣の毒でせう。

**世を背く**　尼になつてでも、世間の物笑になるやうな輕はずみな失錯なしに暮してほしいと思つて居ります。

**いづれも分かず**　大納言は實子繼子の區別なく親らしく世話して居られるけれども。

**うへおはせぬ程は**　お母樣のお留守中は私が代りに來てお世話すべき筈ですが、よそよそしく分け隔てをなさるのでつらい。

さまならず、愛敬づき給へる事はた、（愛敬のある事に於いても）人よりすぐれ給へり。斯くうち參りや何やと、わが方ざまをのみ思ひいそぐやうなるも（實子の事に許りかかつてゐるやうなのも宮の御方に對して氣の毒だ）心苦し、など・思（は）して、紅「さるべからむさまに思し定めて宣へ。同じ事とこそ・仕（は）うまつらめ」と母君（眞木柱）にも聞え給ひけれど、母君「更にさやうの世づきたるさま、思ひ立つべきにもあらぬ氣色（宮の御方の）なれば、なかなかならむ事は心苦しかるべし。（宮の御方に對して）御宿世にまかせて、（宮の御方の運命にまかせて私の生存中は世話しませう）世にあらむ限りは見奉らむ。・・・（なからん）のちぞあはれにうしろめたけれど、（私の死後）世を背くかたにても、（宮の御方が）おのづから人笑へに、あはつけき事なくて過ぐし給はなむ」など、うち泣きて、（死後の事を氣遣ふ故）御心ばせの（宮の御方の性質に何一つ不足はないと）思ふやうなる事をぞ聞え給ふ。（眞木柱が話される）いづれも分かず親がり給へど、御かたち（宮の御方の）を見ばやとゆかしうおぼして、紅「隱れ給ふこそ心憂けれ」と恨みて、（宮の御方を）人知れず、見え給ひぬべしやとのぞきありき給へど、絶えて（宮の御方が物恥をされるから）片そばをだにえ見奉りたまはず。紅（眞木柱）「うへおはせぬ程は、立ちかはりて參りくべきを、疎々しくおぼし分くる御氣

**わが御姫君たちを**　以下紅梅の心中。自分の實の姫君達を、人には劣るまいと自慢してゐたが。**世のなか廣きうちは**　世の中は廣い、その廣い世の中の內は簡單にはいかないものだ。**たぐひあらじと**　自分の姫君達は無類の美人だと思つてゐるのに。

**さもまねび取りつべく**　相當に彈けるやうになるといふ自信があるのでせうか。「侍るらむ」の所河內本は本の儘。**なまかたほに**　琵琶の音は生半端なのは聞きにくいものです。

**翁は取り立てて**　私は取立てて何を習つたといふ事もありませんが、昔年盛りの時代に修行したんおお蔭やら、聞き分けるだけの事は何樂器にかけてもさう不得手ではありませんでしたが。

色なれば、心憂くこそ」など聞えて(宮の御方に)、御簾の前に居給へ(大納言が)ば、御(宮の)いら(御方が)へなどほのかに聞え給ふ御聲けはひなど、あてにをかしう、さまかたち思ひやられて(御簾越しにも)、あはれに覺ゆる、人の御有様(宮の御方の)なり。わが御姫君(大君中君)たちを、人に劣らじと思ひおごれど、この君に(宮の御方)えしもまさらずやあらむ、斯かればこそ世のなか(の)・廣きうちは煩はしけれ、たぐひあらじと思ふに、まさる方もおのづからありぬべかンめり、など、いといぶかしう思ひ聞え給ふ(宮の御方はどんな方かと見たく思はれる)。紅「月頃何となく物さわがしき程に(多忙に紛れて)、御ことのね(あなたの琴の音をさへ)をだに承らで久しくなり(う)侍りにけり。西の方に侍る人は(中君(の))、琵琶を心に入れて侍る。さもまねび取りつべく(ぬ)やおぼえ(し)侍るらむ(べ)。なまかたほにしたるに、聞きにくき、物のねがらなり。同じくは、御心とどめて教へ(中君に)させ給へ。翁(紅梅自身の事)は取り立てて習ふ物侍らざりしかど、そのかみ盛りなりし世に、遊び侍りし力にや、聞き知るばかりのわきまへは、何事にもいとつきなく(う)は侍らざりしを、打解けて(あなたはくつろいで遊び半分にかきならすといふ)も遊ばさねど、





**昔覺え侍る**　昔の音色そのままのやうに聞える。**源中納言**　薫の中納言に昇進の事初見。**手づかひすこし**　撥さばきの少し冴えない點が左大臣に及ばないやうに思ひますが。**御こと**　絃樂器の總稱。ここでは琵琶の事。**押手**　絃を押へて彈く事。琵琶は押手の靜かなのをよいとするものですが、柱を据ゑる位置の加減で、撥音の音色も變つて艶めかしくも聞える、それが女の琵琶として却つて面白いものです。

**心にまかせて**　氣儘に奧の方へ引込んでゐるので。**さぶらふ人さへ**　女房達までが無愛相な仕打をするのが面白くない。**宿直姿**　殿上童の宿直姿は直衣を著て髮を解きさげて居るのをいふ。**麗景殿**　大納言の大君。

時々承る(事はなさらないので度々聞いた事もないが)御琵琶のねなむ、昔覺え侍る。故六條(源氏)の院の御傳へ(御傳を受けて)にて、左(右)(イ右)のおとど(夕霧)なむ此頃世に殘り給へる。源中納言(薫)、兵部卿(匂宮)の宮、何事にも昔の人に劣るまじう、いと契り殊に物し給ふ人々(格別の運命を持つて生れた人々で)にて、遊び(音樂)の方は取り分きて心とどめ給へるを、手づかひすこしなよびたる撥音(はちおと)(など)・・なむ、おとど(夕霧)には及び給はずと思ひ(う)給ふるを、この御ことのねこそ(あなたの琵琶の音は左大臣そつくりです)、いとよく覺え給へれ。琵琶は、押(おし)手(で)しづやかなるをよき事にするものなるに、柱(ぢう)さす程、撥音のさま變りてなまめかしう聞えたるなむ、女の御ことにてなかなかをかしかりける。いで(さあお彈きなさい)遊ばさむや。御こと參れ(誰か琵琶を持つて來なさい)」と宣ふ。女房(宮の御方の侍女)などは、隱れ(大納言に)奉るもをさ〳〵なし。いと若き上臈(身分のよい女房)だつが、見え(大納言に)奉らじと思ふはしも、心にまかせて居たれば、紅「さぶらふ人さへ斯く(も)・もてなすが安からぬ」と腹立ち給ふ。若君(大夫の君)、內(禁中)へ參らむと、宿居姿(とのゐすがた)にて參り給へる、わざとうるはしきみづらより(殊更に儀式ばつた東帶總角のいでたちよりも)も、いとをかしく見えて、いみじくうつくし(う)(大納言の心に)と思しけ(た)り。麗

**讓り聞えて**　麗景殿への傳言よ。あなたに賴んでおいて今晩も御免を蒙りませう。

**ともすれば**　どうかするとあなたは御前の演奏に召出されて笛を吹かれるさうですが、恥かしいね、まだほんとに未熟な笛だもの。

**雙調**　春の調子である。

**なほ搔き合せさせ**　これは宮の御方への言葉。

**皮笛**　口笛の事。大納言はもの馴れた太い聲で口笛を鳴らして琵琶に合はされる。

**知る人ぞ知る**　古今春上「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」

**童にてかやうに**　大納言が高砂を謠つた事、賢木に見える。「かやうにて」とは若君の匂宮に於けるが如く、私も源氏にの意。

**げに人にめでられ**　世間でも言ふやうに人にほめられる爲に生れて來られたやうな方ではあるが、源氏の端くれ程にも思はれないのは、やはりあの當時、源氏を無上の方と思ひ込んだせいかも知れない。

景殿に御ことづけ聞え給ふ。紅「讓り聞えて、今宵もえ參るまじく。惱ましくなむ、と聞えよ」と宣ひて、紅「笛すこしつかうまつれ。ともすれば御前の御遊びに召しいでらるる、傍痛しや、まだいと若き笛を」とうちゑみて、雙調吹かせ給ふ。いとをかしう吹い給へば、紅「けしうはあらずなりゆくは、このわたりにて、おのづから物に合するけなり。なほ搔き合せさせ給へ」と、責め聞え給へば、苦しとおぼしたる氣色ながら、爪彈にいとよく合せて、只すこし搔鳴らし給ふ。皮笛ふつつかに馴れたる聲して。この東のつまに、軒近き紅梅の、いと面白く匂ひたるを見給ひて、紅「お前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿の宮うちにおはすなり。一枝折りてまゐれ。知る人ぞ知る」とて、紅「あはれ光る源氏の、いはゆる御盛りの大將などにおはせし頃、童にてかやうにてまじらひ馴れ聞えしこそ、世と共に戀しう侍れ。この宮たちを、世の人もいと殊に思ひ聞え、げに人にめでられ



**大方にて思ひいで**　私のやうな一般的關係の立場から思ひ出すのでも遣瀨ない悲しさを味はされるのに、近い關係の人で今に生きながらへてゐる人は、命長さの嘆きも一方ならぬ事と思はれます。

**いかがはせむ**　源氏の端が端にも及ばなくても爲方がない。

**阿難が光放ち**　河海「大論云、釋迦佛入二涅槃一之後、阿難登二高座一結二集諸經一之時、其形如レ佛、仍衆會疑二佛再出給一、阿難未レ成二四果一之人也、仍阿羅漢等不レ用レ之、其時阿羅自然現レ瑞」

**心ありての歌**　春風が梅の匂を送るのも心あつての事です。その心を酌んで鶯の訪はぬ事はない筈です。

むとなり給へる御有樣なれども、端が端にも覺え給はぬは、なほたぐひあらじと思ひ聞えし心のなしにやありけむ。大方にて思ひいで奉るも、胸あく世なく悲しきを、けぢかき人のおくれ奉りて生きめぐらふは、おぼろげの命ながさならじかしとこそ覺え侍れ」など聞えいで給ひて、物あはれにすごく思ひめぐらしをれ給ふ。ついでの忍びがたきにや、花折らせて急ぎまゐらせ給ふ。紅「いかがはせむ。昔の戀しき御形見には、この宮ばかりこそは。佛のかくれ給ひにけむ御名殘には、阿難が光放ちけむを、二度出で給へるかと疑ふさかしきひじりのありけるを、闇に惑ふはるけどころに、聞え犯さむかし」とて、

紅梅　心ありて風の匂はす園の梅にまづ鶯のとはずやあるべき

と、紅の紙に若やぎ書きて、この君の懷紙に取りまぜ押したたみて、いだし立て給ふを、をさなき心に、いと馴れ聞えまほしと思へば、急ぎ參り給ひぬ。

**中宮の上の御局より** 若君の參內した時は、匂宮が中宮の上局からわが宿直室へ歸られる途中であつた。上局は中宮女御更衣などの清涼殿に出仕された時の御部屋。

**うちならで** 禁中ばかりでなく氣樂な私の家へも時々は遊びにいらつしやい。

**この君召し放ちて** 匂宮がこの若君だけを一人宿直室へ呼んで話されるので、他の人達は遠慮して近くへも寄つて來ず、又退出したりして靜かになつたので。

**時取られて** 大君に寵を奪はれて體裁がわるいだらう。

**お前にはしも** あなたのおそばには居りたく思ひます。

**我をば人げなしと** 大君は私を一人前の人間にもなつてゐないと念頭にもおいてゐられないといふ事だな。

**ふるめかしき** 私と同じく珍らしくもない皇族で東の方と仰しやる方は、私を愛して下さらぬかと、そつと賴んで見て下さい。

中宮（明石中宮）の上の御局より御宿直所に出で給ふ程なり。殿上人あまた御送り（匂宮を）に參るなかに、見つけ給ひて（匂宮が若君を）、（匂）「昨日はなどいと疾くはまかで（歸宅）にし。いつ參りつるぞ」など宣ふ。（若君）「疾く（昨日）まかで侍りにしくやしさに、『まだうちにおはします』（あなたが禁中に）と人の申しつれば、急ぎまゐりつるや」と、をさなげなるものから、馴れ聞ゆ。（匂）「うち（禁中）ならで、心やすき所にも時々は遊べかし。若き人どもの、そ（何と）こはかとなく（いふ事もなしに）集まる所ぞ（二條院）」と宣ふ。この君召し放ちて語らひ給へば、人々は近う（く）も參らず、まかで散りな・どして、しめやかになりぬれば、（匂）「春宮には、いとますこし許されにためり（な）（なイ）（此頃は春宮から少しは暇を許されてゐるやうだね）。いと繁う思ほしまとはすめりしを（春宮があなたを呼び附けておかれたらしいのに）、時取られて人わろかめり」と宣へば、（若君）「まつはさせ給へ（ひ）りしこそ（春宮が私を）苦しかりしか。お前にはしも」（後はいひにくさうに中止して）と聞えさして居たれば、（匂）「我をば人げなしと思ひ放（はな）たれたるとな。ことわりなり。されど安からず（腹が立つ）こそ。ふるめかしき同じすぢにて、東（ひんがし）と聞ゆなるは（宮の御方の事）、あひ思ひ給ひてむやと、忍び





**怨みてのちならましかば** 返事のないのを怨みをいひやつて後にこの歌を贈られたのではつまらなかつたらうに。湖月抄師說「哢引歌未見、恨ての後さへ人のといふ歌は不叶歟云々」

**色に取られて** 河海抄引「紅の色に取られて梅の花香ぞことごとに匂はざりけり」後撰春上には上句「紅に色をばかへて梅の花」

**御心とどめ給へる** 梅は匂宮のお好きな花だから。

**春宮にもえ參らず** 麗景殿へ父君から御傳言があつたのに。

**心知らむ** 三七四頁「知る人ぞ知る」とあるのを受けた言葉。

**大納言の御心ばへは** 以下匂宮の心中。大納言は我が實子の中君を自分にと思つてゐるらしいと宮はそれと歌の意を考へ合せてゐられたが、自分の愛は宮の御方に深く注がれてゐたので、この方の歌に對してはつきりした返歌はなさらなかつた。

て語らひ聞えよ」など宣ふついでに、この花を（父大納言の折つた紅梅を）奉れば、うちゑみ（匂宮は）て、（匂）「怨みてのちならましかば」とて、うちも置かず御覽ず。枝のさま花房、色も香（か）も世の常ならず。（匂）「園に匂へる紅の色に（園に咲く紅梅はそのめでたさを色に奪はれて香は白梅より劣るといふが）取られて、香なむ白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこく（これは立派に）、取り並べても（色と香とを）咲きけるかな」とて、御心とどめ給へ（ふ）る花なれば、かひありてもてはやし給ふ（持參しがひのあるやうに賞美される）。（匂）「今宵は宿直なめり（私は今夜禁中に）。やがて（このまま）こなたにを（私の宿直所に泊りなさい）」と召しこめつれば（お部屋から出されないので）、春宮にもえ參らず、花も恥（花も恥ぢらふやうな香に匂ふ宮のお側に寢させられたのを）かしく思ひぬべくかうばしくて、けぢかく臥せ給へるを、若き（若君は）心地には、たぐひなく嬉しくなつかしく思ひ（う）聞ゆ。（匂）「この花のあるじは（宮の御方の事）、など春宮には移ろひ給はざりし（入內なさらなかつたか）」。（若君）「知らず。心知らむ人に（匂宮のやうな風流を解した人にあげたいと父の申すのを）などこそ聞き侍りしか」なンど語り聞ゆ。大納言の御心ばへは、わが方ざまに思ふべかめれと（求めると）聞き合せ給へど、思ふ心は殊にしみぬれば、この返りごとけざやかにも宣ひやらず。つとめて（若君の禁中退出の折に）この君のまかづるに、なほざり（冷淡な調子で）なるやうにて、

花（匂宮）の香に誘はれぬべき身なりせば風の便（たより）を過ぐさましやは

さて、（匂）「なほ今は翁どもにさかしらせさせで（これからはお父さんにいらんおせつかいをさせないで）、忍びやかに」と、返す返す宣ひて。この君も、東（ひんがし）のをば、やんごとなく睦まじう思ひましたり。なかなか異方の姫君は、見え給ひなどして（異腹の姉君達は却つて心おきなく若君と逢つたりなどして常の姉弟らしい關係にあるのだが）、例のはらからのさまなれど、童（わらは）心地に、いとおもりかにあらまほしう（宮の御方の輕はずみしない申分のない性格を）おはする心ばへを、かひあるさまにて見奉らばやと思ひ（宮の御方をお世話のしがひのあるやうにしてあげたいと若君は始終心がけて）ありく（ゐたのだが）に、春宮の御方（大君）の、いと花やかにもてなし給ふにつけて、同じ事とは思ひながら、いと飽かず口惜しければ、この宮（匂宮）をだにけぢかくて見奉らばやと思ひありくに、嬉しき花のついでなり。これは昨日の御返りなれば見せ奉る（父大納言に）。（紅）「ねたげにも宣へる（憎らしい事を仰しやる）かな。あまりすきたる方に進み給へるを、許し聞えずと聞き給ひて、左（右）のおとど（夕霧）など、我等が見奉るには、いと物まめやかに御心をさめ給ふこそをかしけれ。あだ人に（と）せむに足らひ給へる御さまを、強ひてまめだち給はむも、見所すくなくやならま（あ）し」な

**花の香に**　花の香に招かれさうな私でしたら、かうしたおたよりを其儘にしておきませうや。

**忍びやかに**　こつそり宮の御方に手引してくれ。

**この君も**　この若君も宮の御方を以前よりもずつと敬ひもし睦まじくも思ふやうになつた。

**かひあるさまにて**　若君は宮の御方を匂宮へと思つてゐるのである。

**同じ事とは**　同じ姉君故誰の出世を見ても同じ氣持にゐられさうなものだが、宮の御方をさう出來なかつた事が殘念の故、せめて匂宮をなりとこの姉の婿にと思つてゐた際とて、あの花のついでを嬉しく思ふ。

**あまりすきたる方に**　日頃あまり浮いた御様子に見えるのを、我々がやかましくいふとお聞きになつて、左大臣や私の手前だけを、浮立つ心を靜めて眞面目らしくしてゐられるのがをかしい。

**あだ人に**　浮氣者の資格は十分具へておいでになりながら、強ひて眞面目ぶられたら、見ばえが少くなる事だらう。





ど、しりうごちて（蔭言をいはれて）、今日も參らせ給ふ（若君を禁中に）に、又（匂宮への御文）、

（紅梅）「本つ香の匂へる君が袖ふれば花（中君の事）もえならぬ名をや散らさむ

とすきずきしや（好色がましい事を申しました）。あなかしこ」と、まめやかに聞え給へり。（匂宮）誠にいひならさむと思ふ所あるにやと（の心中）、さすがに御心ときめき（氣がはずんで）し給ひて、

（匂宮）花の香を匂はす宿にとめゆかば色にめづとや人の咎めむ

なンど、なほ心解けず（打解けない御返歌ぶりなので）いらへ給へるを、心やましと思ひ居給へ（大納言は面白からず思つてゐられた）り。

北の方（眞木柱が春宮から）まかで給ひて、うちわたりの事（禁中の樣子を）宣ふついでに、（眞木）「若君の、一夜宿直して（匂宮の宿直所に）まかり出でたりし匂ひの、いとをかしかりしを、人はなほと思ひしを、宮（春宮）の（ふ）いと思ほし寄りて、（春宮御詞）『兵部卿の宮に近（若君が匂宮に）づき聞えにけり、うべ我をばすさめたり（けり）・』と氣色取り（察して）、ゑ（怨）んじ給ひ（へり）・しこそをかしかりしか。ここに御せうそこ（大納言から匂宮へ）やありし（く）。さも見えざりしを（若君は手紙を持つてもゐなかつたやうだが）」と宣へば、（紅）「さかし。梅の花（匂宮は）めで給ふ君（宮）な

**本つ香の**　もと〳〵芳ばしい君のお袖が觸れたならば、花も一方ならぬ名聲を博する事でせう。兼輔集―「もとのかのあるだにあるを梅の花いとど匂ひのはるかなるかな」

**誠にいひならさむと**　本當にこんなことをいふ仲にならうといふ考があるのか。中君を娶さうといふ積りなのか。

**花の香を**　花の香に匂ふ宿に訪ねて行つたなら、あまりに色めかしい心と人が非難しないでせうか。

**若君の**　若君が先夜禁中に宿直して翌朝私方へ來ました折、大層よい匂をさせてゐましたのを、外の人は矢張若君自身の匂と思つてゐましたのに、春宮がそれと思ひついて。

**ここに御せうそこや**　あなたから匂宮にお手紙でもおあげになりましたか。そんな樣子も見えませんでしたが。

**まじらひし給はむ**　宮中に宮仕する婦人達などは、あんなには焚きしめる事は出來ませぬ。

**人がこそ**　體臭が何ともいへない。

**同じ花の名なれど**　同じ花でありながら、芳香を有する梅は、どうしてさういふ因縁があつたのであらうかと、その根元について感慨多く見てをる。

**花によそへても**　中君を匂宮へとの下心があるから。

**何事も見知り**　何でもお分りになつて、それと氣がつかぬ譯ではないが、結婚して人並の生活をしようなどといふ事は、すつかり思ひ切つてゐられる。

**こなたは**　父宮のない宮の御方は萬事ひつそりと、引込みがちでいらつしやるのを、匂宮は聞き傳へて、それこそ自分にふさはしいと思召して。河内本は「ふさい」の右傍に夫妻の字をあててある。

れば、あなた（宮の御方の）のつまの紅梅いと盛りなり（に見え）・しを、ただならで（見過す事が出來ずに）、折りて奉れ（匂宮に）たりしなり。移香は（匂宮の移香は格別ですね）、げにこそ心殊なれ。まじらひし給はむ女などは、さはえしめぬかな（匂宮のやうには）。源（薫）中納言は、かうざま（匂宮のやうに風流）に好ましうは（がましくは）焚き匂はさで、人が（ら）・こそ（一本人がらこそ）世になけれ。怪しうさき（前世）の世の契り（の因縁が）いかなりける報いにかと、ゆかしき事にこそあれ。

同じ花の名なれど、梅は生ひ出でけむ根こそあはれなれ。この宮（匂宮）などのめで（梅を）給ふ、さる事ぞかし」など、花によそへて（引きならべて）もまづかけ聞え給ふ（宮の噂をされる）。

宮の御方は、物おぼし知る程（物心がつくまでに）にねびまさり給へれば、何事も見知り、聞きとが（ど）め給はぬにはあらねど、人に見え、世づきたらむ有様は、更におぼし離れたり。世の人も、時に寄る心（權元につく人心）ありてにや、さし向ひたる御方々には（兩親の揃つてゐられる姫君達には心を盡していひ寄り）、心を盡し聞えわび、今めかしき事（賑やかな事）多かれど、こなたはよろづにつけ、物しめやかに引き入り給へるを、宮は御ふさひの方に聞き傳へ給う（ひ）て、深ういかで（ぜひともわがものにしよ



**大納言の君深く**　大納言がこの匂宮を中君の聟にと深く心がけて、宮がその積りで申込んで來られたらと、宮に下心をほのめかし、その心構へをしてゐられるのを見ると北方は氣の毒になつて。

**引きたがへて**　匂宮が大納言の思はくとは違つて、この通り少しも受附ける氣のない宮の御方に、假初にせよ言葉を盡して言ひ寄られるが、それは何のかひもなささうな事だ。

**何かは**　以下眞木柱の心中。いやなあに。宮がそれ程熱心ならば許さう、の心である。

**などかは**　匂宮を宮の御方に許しても何のわるい事があらうぞ。

**八の宮**　桐壺院の第八皇子で源氏の御弟。宇治に隱棲された。橋姫卷以下に見える。

**いとどつつましければ**　さうした浮氣の點や何かで一層氣が進まないので、眞木柱は匂宮を斷念はしてゐられたが。「いとど」とは、大納言の意志に違ふ上に好色といふ事もあるからの言である。

う）と（うと）思ほしなりにけり。若君を常にまつはしよせ（そばに引附けておかれて）給ひつつ、忍びやかに・・（おほん）御文（宮の御方の所へ）あれど、大納言の君深く心かけ聞え給ひて、さも思ひ立ちて宣ふことあらばと、氣色（匂宮に）取り、心まうけし給ふを見るに、いとほしう、「引き（眞木）たがへて、斯く（う）思ひ寄るべく（う）もあらぬ方（宮の御方）にしも、なげ（匂宮が）の言の葉を盡し給ふ、かひなげなる事」と北（眞木柱）の方もおぼし宣ふ。はかなき御返り・などもなければ（宮の御方から匂宮へ）、負けじ（匂宮は）の御心添ひて、思ほしやむ（諦められさうもない）べくもあらず。何かは。人（匂宮）の御有様などかは、さても見奉らまほしう（匂宮は聟として通はせたい方ではあり將來もある方のやうだから）、生ひ先遠くなどは見えさせ給ふに、（を）など、北（眞木柱）の方思ほし寄る時々あれど、いとい（匂宮は）たう色めき給ひ（う）て、通ひ給ふ忍び所多く、八（宇治八宮）の宮の姫君にも、御志淺からで、いと繁うまかでありき給ふ、頼もしげなき御心のあだあだしさなども、いとどつつましければ、まめやかに（本當に）・（は）思ほし絶えたるを、忝きばかりに（匂宮の御志を忝く思ふとだけの點で）、忍びて、母君（眞木柱が）ぞたまさかにさかしら（差出た返事をされた）がり聞え給ふ。

# 竹の

匂宮の并の二。〔細〕横の并也。又末は竪のごとし。薫十四ばかりと書て、次の年正月より七月まで書て又次の年の事あり。又年頃ありてとありて。年年うつると見えたり。〔孖〕同義。かをるは十四の年二月に侍從に任ぜるよし、匂宮卷に見えたり。さて又其末に中納言になり給ふ事をしるせり。かをる中納言になる事は、椎本卷に匂宮はつせまうでの年の秋の事也。(花二八・九三六)かをる廿二歳の時也。匂宮卷は十四歳より十九歳の秋、宰相中將に任ずるまでの事有り。是をもていへば、匂宮卷には横の并也。然共匂宮卷には中納言の事なし。然ば中納言に任じてよりは、又竪并といふべし。仍竪横を兼たる并成るべし。〔三〕同義。〔三〕所詮當流の習ひ、并の卷に年紀の義不用之。人人各各依(テ)為(タルニ)列傳(ト)也。諸抄の趣一往注すといへども、これをけづるべき也。



これは源氏の御族(かんぞう)にも離れ給へりし後(のち)の大殿(鬚黒)(の)・わたりにありけるわる御達(ごたち)の、落ち(殘りとどま)とまり殘れるが、問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女ども(わる御達)のいひけるは、「源氏の(源氏の子孫に)御末々に、(關して間違つた惡評などのまゝ聞えるのは自分達よりお婆さんな耄碌してゐる人の覺え誤りからだらうか)ひがごとどものまじりて聞ゆるは、我よりも年のかず積り、ほけたりける人のひがごと(覺え)にや」など怪しがりける、何れかは・誠ならむ。

(玉鬘)内侍のかみの御腹に、故殿(鬚黒)の御子は、男三人、女二人なむおはしけるを、さまざま(二人の女子をそれぐに彙成しようと)にかしづき立てむ事をおぼし(鬚黒が)おきて(て)・、年月の過ぐるも心もとながり(待遠しがつてゐられた間に)給ひし程に、あへなく(鬚黒がはかなく)亡せ給ひにしかば、夢のやうにて、いつしか(早くと)と急ぎおぼしし御宮仕も怠りぬ。人の心、時にのみ寄るわざ(さが)なりければ、さばかり(の)・いきほひかめしく(う)おはせしおとど(鬚黒の後だから)の御名殘、うちうちの御寶物、らうじ(領)給ふ所々(など)・・、その方の衰へはなけれど、大方の有様引きかへたるやうに、殿(邸内は)のうち(人目も絶えて)しめやかになりゆく。かん(う)の君の御近き

**これは** この卷に記す事は。下の「問はず語りしおきたる」の主語。

**源氏の御族にも** 源氏の一門には關係のない後の太政大臣家に仕へてゐた口さがない女房達の此頃迄生き殘つてゐたのが、問はず語りに語りおいた話だ。それは源氏に緣ある人々の話らしくはないやうだが。

**故殿** 鬚黒逝去の事初見。

**御宮仕** 姫君達の宮仕の事も延びぐになつた。

**人の心** 襟元にのみつくのが人情故。

**大方の有様** 一體の様子が鬚黒の生前とは打つて變つた有様で。

**かんの君の** 玉鬘の近親者、即ち致仕大臣の子孫は隨分世に時めいてゐられるが、貴人の親類關係の常として、却つてもともと親しくなかつた上に。

ゆかり、そこらこそは世に・・(満ち)廣ごり給へ・(れ)ど、なか〳〵やんごとなき御中らひの、もとよりも親しからざりしに、故殿〔髭黒が多少人情味〕の、なさけすこし〔が薄くむら氣の人であつたので〕おくれ、むら〳〵(すく)しさ過ぎ給へりける御本性〔(しゝ)ほんじやう〕にて、心おかれ給ふ・・・(へりける)事もありけるゆかりにや、誰にもえ懷〔なつか〕しう聞え通ひ給はず。六條の院〔源氏〕には、すべて(末ま)なほ昔に變らずかずま〔玉鬘をわが子の數に〕へ〔入れて〕聞え給ひて、亡せ給ひなむ後の事ども〔死後の遺産處分に關する遺書にも〕書きおき給へる御そうぶんの文どもにも、中宮〔明石中宮〕の御次に加へ奉り〔玉鬘の事を書き加へておかれたから〕給へれば、右の大殿〔夕霧〕などは、なか〳〵その心〔源氏の遺志を奉じて〕ありて、さるべき折々音〔玉鬘を〕づれ聞え給ふ。殿〔髭黒〕男君だちは御元服などして、おの〳〵大人び給ひにしかば、おはせでのち、心もとなくあはれなる事・(ど)もあれど、おのづからなり出で〔出世しさうにも思はれる〕給ひぬべかめり。姫君たちを、いかにもてなし奉らむと思し亂る〔玉鬘が〕。うち〔禁中〕にも必ず宮仕の本意深きよしを、おとど〔髭黒が生前に〕の奏しおき給ひ・(い)(へり)ければ、大人び給ひぬらむかしと、年月を推し量らせ給ひて、仰言〔今上から〕絶えずあれど、中宮〔明石中宮〕のいよ〳〵並びなくの

**心おかれ給ふ**　人から敬遠される事もあつた關係からか、今では玉鬘は誰にも近親中の交際はえうなさらない。

**なか〳〵**　玉鬘の近親よりも、血のつながりのない夕霧が却つて。

**男君だち**　玉鬘の腹。右兵衞督、右大辨、頭中將。

**心もとなく**　官位昇進などに關して不安を覺え悲しい事もあるが。

**大人び給ひぬらむ心**　主上も姫君達が成人された事だらうと年月をよみつつ絶えず御内命は下るけれども。





みなりまさり給ふ御けはひに壓されて、皆人無德〔むとく〕に物し給ふめる末に參りて、遙〔遙かの上席から中宮に睨まれるのも〕に目をそばめられ奉らむも煩はしく、又人に劣り、かずならぬさまにて見む、はた心づくしなるべきをお・(き)(こ)ぼしたゆたふ。冷泉・(れぜい)院より・いと〔(又)姫君を參らせよと〕懇に思し宣はせて、かんの君の昔・(の)本意なくて過ぐし給ひしつらさをさへ、とりかへし恨(さね)み聞え給ひて、「今〔冷泉〕〔あの當時よりも私が一層年とつて見苦しくなつたと嫌はれるでせうが〕はまいてさだ過ぎ、すさまじき有樣に(を)思ひ捨て給ふとも、うしろやすき〔姫君に取つて安心な〕親になずらへて、ゆづり〔姫君を私に〕〔ゆるしイ〕給へ」と、いとまめやか〔本氣になつて〕に聞え給ひければ〔玉鬘に〕、いかがは(な・・・)あるべき事な・・・(にかある)らむ(べかし)、みづからのいと口惜しき宿世にて、思ひの外に心づ〔院の思召〕きなしと〔に背いて〕おぼされにしかば、恥かしう忝きを、この世の末にや御覽じなほされまし、など定め〔迷つてゐられる〕かね給ふ。かたちいとようおはする聞えありて、心かけ申し〔申入れる〕給ふ人多かり。右の大〔夕霧〕との(い)(殿)の藏人の少將とかいひしは、三條殿〔雲居雁〕〔どの〕の御腹にて、兄君たちよりも引き越し、いみじうかしづき給ひ・(て)、人がらもいとをかしかりし君、

**皆人無德に**　女御更衣達誰もかたなしの有樣でゐられる末席に連つて。

**又人に劣り**　自分の娘が他の人に劣つたみじめな有樣で居るのを見るのも心配の種だらうと玉鬘は思つて、宮仕を躊躇してゐられる。

**かんの君の昔本意なくて**　玉鬘が昔冷泉院の思召に背いて髭黒に嫁した恨迄も事新らしく仰せられて。

**いかがはあるべき**　以下、玉鬘の心。どうしたものだらう、自分の運命が拙かつたので、心ならずも院の御不快を招いたのは恥かしく勿體ない事だ、晩年の今、娘を宮仕させる事によつて院の御機嫌を直して頂かう。

**かたちいとよう**　玉鬘の姫君達は美人の噂が高くて。

**藏人の少將**　夕霧の五男で雲居雁の腹。

**いづ方につけても**　藏人少將は玉鬘の甥で玉鬘は源氏の養女ではあるから。

致仕大臣 ┬ 玉鬘 ─ 姫君達
　　　　 ├ 雲居雁 ═ 藏人少將
葵上 ═ 源氏 ─ 夕霧

**けどほく**　玉鬘も疎々しくは取扱はれない。

**夜晝あたり去らぬ**　藏人少將の申込を女房がお側について居てやかましく玉鬘に取次ぐので。

**母北の方の**　少將の母雲居雁も少將の爲に度々御文を玉鬘に贈られる。

**いとかろびたる**　藏人少將はまだ、輕い身分ですが、親類の間柄故、御承諾下さいませんか。

**ただのさまにも**　普通の結婚をといふやうな意志がない。

**今すこし**　藏人少將がもう少し人聞きわるくない程度に昇進して釣合の身になつたら許してもよからう。

**こよなき事とは**　玉鬘はこの縁をまるで釣合はぬ事とは思つてゐられないが、女の方で承知して居ないのに、もしもの事があつたら世間の聞えも輕々しい事であるから。

**くたされて**　女房達は玉鬘の詞に氣先を折られて難義な事だといつて居つた。

(玉鬘の姫君に)いと懇に申し給ふ(に)・。いづ方につけても、(近親の中)もて離れ給はぬ御中らひなれば、(藏人少將などが玉鬘方に)この君達の睦び參り給ひなどするは、(いと)・・けどほく(などは)・・もてなし給はず。(藏人少將は玉鬘方の女房にも)女房にもけぢかう馴れ寄りつつ、(戀中を)思ふ事を語らふにも(力づよくて)たよりあり(る心地し)・・・て、夜晝あたり去らぬ耳か(すき)しがまし(ずきこ)さを、うるさきものの心苦しきに(玉鬘)かんの殿もお(も)・ぼしたり。母北の方の御文も、しばしば奉り給ふ(ひこ)・。(夕霧)「いとかろ(る)びたる程にはべ(め)・れど、お(も)・ぼし許す方もや」となむ(夕霧からも玉鬘に)おとども聞え給ひける。(玉鬘の長女)姫君をば、更に(入内させたい希望を持つてゐられたので)ただのさまにもおぼしおきて給はず、中の君をなむ、今すこし世の聞えかろ(る)〲しからぬ程になずらひなら(給ひな)・ば、(玉鬘が)さもや、とおぼしける。(一方少將はもし玉鬘が)許し給はずば、盜みも取りつべく、(怖ろしいほど)むくつけきまで思へり。こよなき事とはおぼさねど、女方の、心ゆるし給はぬ、(まちがひなどあつては)事の紛れあるは、世の音聞きもあはつけきわざなれば、(少將の文を取次ぐ女房にも)聞えつぐ人をも、(十分氣をつけて)「あなかしこ、過ち引き出づな」など宣ふに(なん)・・(柄)くたされてなむ煩はしがりける。

**六條の院の御末**　以下薫の事。

**四位の侍從**　匂宮卷に「十四にて二月に侍從になり給ふ。秋右近中將になりて、御たうばりの加階などをさへ」とあつた。三五三頁。

**君だちに引かれて**　薫も鬚黑の子息達に誘はれて玉鬘邸に遊びに來られる時もある。

**六條の院の御けはひ**　薫は源氏の子と思ふせいで格別に見えるのかも知れないが、世間から何の理由もなくてもてはやされる方であつた。

(源氏の晩年)六條の院の御末に、朱雀院の(三の)・・宮(女三宮)の御腹に生れ給へりし君(薫)(は)・・、冷泉(れぜい)・院に(の)御子のやうにおぼしかしづく(薫の事)四位の侍從、その頃十四五・ばかりにて、いときびは(子供らしく)にをさなかるべき程よりは(割合には)、心おきて大人々々しく(あるべかしうをさ)めやすく(しく)・・、人にまさりたる生ひ先しるく(將來が期待される)見(物し)え給ふを、(玉鬘)かんの君は、婿(も)にても・見まほしく思(と)したり。この(玉鬘邸)殿は、かの三條の宮(女三宮邸)といと近き程なれば、さるべき折々の遊び所に(は)・、君だちに引かれて見え給ふ時(折)々あり。(玉鬘邸は)心にくき女の(二人の姫君達)おはする所なれば、若き男の・・心づかひせぬなう、見え(頻りに出入りしてゐる中で)しらがひさまよふなかに、(男振のいゝのは)かたちのよき(さ)は、(あの始終入りびたりの)この立ち去らぬ藏人(夕霧の子)の少將、(やさしく)なつかしく(う)心恥(ゆかしい所があつて)かしげにてなまめいたる方は、この(薫)四位の侍從の御有樣に、似る人ぞなかりける。六條の院の御けはひ近うと思ひなすが・、(ところ)・・ことなるにやあらむ、世の中に・おのづからもてかしづかれ給へる人(心ことなるイ)(ふ・)(薫)なり。(若女房達)若き人々・・は、心殊にめであへり。(玉鬘)かんの殿も、(玉鬘)「げにこそめやすけれ」(世間の評判どほりで難はない)など宣ひて、なつかしう

**院の御心ばへを** 故六條院のお心が思ひ出されて、悲しさの紛れる時もないやうな氣がしますのに、その御形見としてはあなたの外にはございませぬ。

**ここかしこの** 女三宮邸玉鬘邸それ〴〵に仕へてゐる女房達。

**大納言** 藤大納言。致仕大臣の息で右大臣の四君腹。賢木卷韻塞の折高砂を謡つた。後の紅梅右大臣。

**世と共に** 下の「うちしめりて云々」に續く。藏人少將は、父母に格別愛撫されてゐられるものの、始終沈み込んでゐられて、物思はしげに見える。

物・・聞え給ひなどす。玉「院の御心ばへを思ひいで聞えて・、慰む世なういみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも、誰をかは見奉らむ。右のおとどは事々しき御程にて、ついでなき對面も難きを」など宣ひて、はらからのつらに思ひ聞え給へれば、かの君も、さるべき所に思ひ・・・て參り給ふ。世の常のすき〴〵しさも見えず、いといたうしづまりたるをぞ、ここかしこの若き人ども、・・・口惜しくさう〴〵しき事に思ひて、いひ惱ましけり。

睦月の朔日ごろ、かんの君の御はらからの大納言、「高砂」うたひしよ、藤中納言、故大殿の太郎、眞木柱の一つ腹など參り給へり。右のおとども、御子ども六人ながら引きつれておはしたり。御かたちよりはじめて、飽かぬ事なく見ゆる、人の御有樣覺えなり。君だちも、さま〴〵いと淸げにて、年の程よりは、官位も過ぎつつ、何事を思ふらむと見えたるべし。世と共に、

**昔にかはらず** 昔と同じく几帳隔てて。

**その事となくて** 用事もないので御無沙汰して居りました。

**うち參りより** 參内以外の出あるきなどはきまりわるくなつてしまひまして、昔物語をしたい折々もありますが、大抵は其儘に過して殘念です。

**必ずその志** こちらの好意を見知つて頂くやうに深切に御用を勸めよ。

**思しかずまふる** 人がましく思召してお訪ね下さいますにつけて。

**はか〴〵しう後見なき** しつかりした後見のない人が宮仕に出る事は却つて見苦しいものと、それやこれや考へて迷つて居ります。

藏人の君は、かしづかれたるさま殊なれど、うちしめりて、思ふことありがほなり。おとどは御几帳隔てて、昔にかはらず御物語聞え給ふ。夕「その事となくて・、しば〳〵も・え承らず。年のかず添ふままに、うち・參りより外のありきなど、うひ〳〵しくなりにて侍れば、古への御物語も、聞えまほしき折々多く過ぐし侍るをなむ。若きをのこどもは、さるべき事には召し使はせ給へ。『必ずその志御覽ぜられよ』と誡め侍り」など聞え給ふ。玉「今は斯く世に經るかずにもあらぬやうになりゆく有樣を、思しかずまふるになむ、過ぎにし御事も、いと忘れがたく思う給へられける」と申し給ひけるついでに、院より宣はすること、ほのめかし聞え給ふ。玉「はか〴〵しう後見なき人のまじらひは、なか〳〵見苦しきをと、かた〴〵思ひ給へなむ煩ふ」と申し給へば、夕「うちに仰せらるる事のあるやうに承りしを、いづ方に思ほし定むべき事にか。院は、げに御位を去らせ給へる

**世にありがたき**　世にもまれな御姿は、いつ迄もお若くていらつしやるのですから、私も人並の娘を持つて居つたらと思つては居るのですが、お立派な方々の揃つていらつしやる院の後宮の仲間入りさせるやうな娘のない事が殘念です。

**女一の宮の女御**　女一の宮の御母女御弘徽殿と申し冷泉院の女御。致仕大臣の女で玉鬘の異母姉妹。弘徽殿と玉鬘とは異母姉妹故、玉鬘が院に姫君をあげる事は最も憚るべき事であるから夕霧が懸念したのである。

**つれ〴〵に**　此頃ひまになつて所在がないので、院諸共に世話して退屈凌ぎにしたいからなどとお勸め下さいますにつけて、私もどうしたらよいかと思案する所まで漕ぎつけたのでございます。

**朱雀院の古き**　朱雀院に昔から心を寄せてゐる人々、又源氏に交誼の深かつた人々も、それやこれやの關係から。女三宮は朱雀院の愛子で源氏の北方である。

**入道の宮**　女三宮。河内本は本の儘。

**左近の中將**　以下三人共鬚黑の子で玉鬘の腹。

にこそ盛り過ぎ・たる心地すれど、世にありがたき御有様は、・・ふりがたくのみおはしますすめるを、よろしう生ひ出づる女子侍らましかば、と思ひ給へ寄りながら、恥かしげなる御なかに、まじらふべきものの・侍らでなむ口惜しう思う給へらるる。そも〳〵、女一の宮の女御は、許し聞え給ふや。さき〴〵の人、さやうの憚りにより、滞ることも侍りし・・」と申し給へば、玉「女御なむ、つれ〴〵にのど・かになりにたる有様も、同じ心に後見て慰め・まほしきを、など、かの勸め給ふにつけて、いかがなどだに・・・思う給へ寄るになむ」と聞え給ふ・。これかれ此處に集まり給ひて、三條の宮に參り給ふ。朱雀院の古き心物し給ふ人々、六條の院の方ざまのも、かた〴〵につけて、なほかの入道の宮をば、えよぎず參り給ふなめり。この殿の左近の中將、右中辨、侍從の君なども、やがておとどの御供に出で給ひぬ。引きつれ給へるいきほひ殊なり。



**そこら大人しき若君だち**　今日夕霧などと一緒にこの邸に來られた人々をいふ。

**何れかは**　不器量な人は一人もない。

**立ちおくれて**　他の公達より後れて顏を出された。

**この殿の**　こちらの姫君の御そばには、この方を並べて御夫婦として眺めたいものだ。

**姫君と聞ゆれど**　いくら世間知らずの姫君でも、物の分る方なら、ほんとに人一倍美しい方のやうだと、その美しさを識別される事だらうと思はれる。

**かんの殿**　玉鬘。

**東の階**　御念誦堂の階段。

**おほどか**　初鶯故囀の節まはしも大やうでこまかでない事。

**言ずくなに**　薫は詞少なに取澄ましてゐるので、女房達は憎らしがつて。

夕つけて四位の侍從參り給へり。そこら大人しき・若・君だちも、あまたさま〴〵に、何れかはわろびたりつる。皆めやすかりつるなかに、立ちおくれてこの君の立ち出で給へる、いとこよなく目と・まる心地して、例の物めでする若き人達は、「なほ殊なりけり」などいふ。「この殿の姫君の御かたはらには、これをこそさし並べて見め」と、聞きにくくいふ。げにいと若うなまめかしきさまして、うち振舞ひ給へる匂ひ香など、世の常ならず。姫君・と聞ゆれど、心おはせむ人は、げに人よりはまさる・・なめりと、見知り給ふらむかしとぞ覺ゆる。かんの殿・、御念誦堂におはして、玉「こなたに」と宣へ・ば、東の階より昇りて、戸口の御簾の前に居給へり。お前近き若木の梅、心もとなくつぼみて、鶯の初聲もいとおほどかなるに、いとすかせ奉らまほしきさまのし給へれば、人々はかなき事をいふに、言ずくなに心にく・き程なるを、ねたがりて、宰相の君と聞ゆる上﨟

の詠みかけ給ふ・。

折りて見ばいとど匂もまさるやとすこし色めけ梅の初花

口早しと聞きて、

「よそにてはもぎ木なりとや定むらむ下ににほへる梅のはつはな

さらば袖觸れて見給へ」など・いひすさぶ・に、「誠は色よりも」と、口々引きも動かしつべくさまよふ。かんの君、奥の方よりゐざり出で給ひて、「うたての御達や。恥かしげなるまめ人をさへ。よくこそおもなけれ」と忍びて宣ふな・り。まめ人とこそつけられたりけれ、いとくつしたる名かな、と思ひ居給へり。あるじの侍從、殿上なども・まだせねば、所々・もありかで、おはしあひたり。淺香の折敷二つばかりして、菓子、盃ばかりさし出で給へり。おとどはねびまさり給ふままに、故院にいとようこそ覺え奉り給へれ、この君は、・・・似給へるところ

**折りて見ば**　枝ながら眺めるよりも手折つて見たら一層美しからうと思はせるやうに、梅の初花よすこし色めかしい樣子をしてくれ。まじめくさらないで少しは浮氣らしい樣子も見せて下さい。

**よそにても**　よそ目にはもぎ木ときめて居るかも知れないが、内々はよい香を包んでゐる初花です。決して無風流な私ではない。

**色よりも**　古今春上「色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖觸れし宿の梅ぞも」本當に香の方に心を引かれるの意で、薫の歌の「下に匂へる」を受けた言葉。河内本に「誠に」とあるのが宜しい。

**うたての**　いやな人達だ。御達は女房達の事。

**まめ人とこそ**　まめ人といふ名をつけられてしまつた、何といふ不景氣な名だらう。

**あるじの侍從**　玉鬘の腹、髭黒の三男で夕霧を送つて出かけて既に歸宅したのである。薫も侍從故内の侍從といふ意味で「あるじの侍從」といふ。

**淺香**　沈香の若いもの。



も見え給はぬを、けはひのいとしめやかに、なまめいたるもてなしぞ、かの御若盛り思ひやらるる、かうざまにぞおはしけむかし、など思ひいで聞え給ひて、うちしほたれ給ふ。名殘さへとまりたるかうばしさを、人々はめでくつがへる。

侍從の君、まめ人の名をうれたしと思ひければ、廿よ日の頃、梅の花盛りなるに、匂ひすくなげに取りなされしすき者ならは・さむかし、と思して、藤侍從の御もとにおはしたり。中門入り給ふ程に、・・同じ宿直姿なる人立てりけり。隱れなむと思ひけるを、引きとどめたれば、この常にたち煩ふ少將なりけり。寢殿の西おもてに、琵琶、箏のことの聲するに、心をまどはして立てるなめり、苦しげや、人の許さぬ事・思ひ始めむは、罪深かるべきわざかな、と思ふ。ことの聲もやみぬれば、「いざしるべし給へ。まろはいとたどたどし」とて、引きつれて、西の渡殿の前なる紅梅の木のもとに、「梅が枝」をうそぶきて立ち

**かの御若盛り**　源氏の御若盛りの頃が偲ばれる。故院の若盛りは、屹度かうした風でいらつしやつたらう。

**匂ひすくなげに**　自分を色氣の足りないやうに扱つたあの浮氣女房共に本當の自分を見馴れさせてやらうと思つて。

**人の許さぬ事**　玉鬘が許さないのに姫君に戀するとは罪の深かりさうな事だ。

**いざしるべし給へ**　さあ案内して下さい。私は薩張勝手が分りませぬ。

**梅が枝**　催馬樂呂梅枝「梅が枝に來居る鶯や、春かけて、はれ春かけて、鳴けどもいまだや、雪は降りつつ、あはれ、そこよしや、雪は降りつつ」

人々　女房達。
あづま　東琴。和琴。六絃の琴。
女のことにて　呂の調子は女の琴ではかうまでは合せかねるものだのに、これは實にうまいものだ。

侍從の君　玉鬘の三男。
故致仕のおとどの　あなたの御爪音は故致仕大臣のそれに似通つていらつしやると承つて居りますから、心から拜聽したいと存じます。
鶯にもさそはれ　鶯の音に誘はれて一曲お聞かせ下さい。文集十八律詩春江「鶯聲誘引來花下」や同廿八律詩天宮閣早春「林鶯何處吟箏柱」などによつていつた言葉。
常に見奉りむつび　致仕大臣は常に親しくもしてゐなかつた親だが、もうこの世にはいらつしやらないのだ、と思ふと玉鬘は大層心細くて。
大方この君は　玉鬘の獨言。大體薫といふ人は不思議に故大納言によく似てゐて、琴の音などは、まるでそつくりです。

寄るけはひの、花よりもしるく、さとうち匂へれば、妻戸おしあけて、人々あづまをいとよく掻合せたり。女のことにて、呂の歌は・か・うしも合せぬを、いたし、と思ひて、今一かへり折り返し謠ふを、琵琶も二なく今めかしう。故ありてもてない給へるあたりぞかし、と心とまりぬれば、今宵はすこし打解けて、はかなしごとなどもいふ。うちより和琴さし出でたり。かたみに讓りて手觸れぬに、侍從の君して、かんの殿、玉「故致仕のおとどの御爪音になむ・・・通ひ給へると聞きわたるを、まめやかにゆかしくなむ。今宵はなほ鶯にもさそはれ給へ・・」と宣ひ・だしたれば、あまえて爪くふべきことにもあらぬを、と思ひて、をさ〳〵心に・入らず掻きわたし給へる氣色、いと響き多く聞ゆ。常に見奉りむつび・・ざりし親なれど、世におはせずと思ふに、いと心細きに、はかなき事のついでにも思ひ出で奉るに、いとなむあはれなる。玉「大方この君は、怪しう故





古めい給ふしるし　年寄つた證據。
さき草　催馬樂呂此殿者「この殿はむべも、むべも富みけり、さき草の、あはれさき草の、はれ、さき草の、三つば四つばの中に、殿作りせりや、殿作りせりや」
さかしら心つきて　餘計な世話を燒く老人も居ないので、自然互に感興をそゝられて演奏してゐられたのであるが。
竹河　催馬樂呂竹河「竹河の橋のつめなるや、花園に、はれ、花園に我をば放てや、我をば放てや、めざしたぐへて」
いかにもてない　そんなに私に酒を飮ませてどうなさるお積りですか。
小袿かさなりたる細長　祿には女の裝束一具が常であるのに、これはありあはせのさまである。
何ぞもぞ　これは何といふかづけ物ぞ。思ひがけない物でびつくりした。
水驛にて　男踏歌の時踏歌の人をもてなす所に簡略に酒や湯漬などを用ひるのを水驛といふ。竹河は踏歌の時の謠物であるから、一寸立寄つて直に歸る積りであつたが、思ひがけずも遲くなつたといふ意をひつかけて戯れていつたもの。

・大納言の御有樣にいとよう覺え、ことのねなど・、ただそれとこそ覺えつれ」とて泣い給ふも、古めい給ふしるしの淚もろさにや。少將も聲いと面白うて「さき草」謠ふ。さかしら心つきて打過ぐしたる人もまじらねば、おのづからかたみに催されて遊び給ふに、・あるじの侍從は、故おとどに似奉り給へるにや、かやうの方はおくれて、盃をのみすすむれば、「ことぶきをだにせむや」と恥かしめられて、「竹河」を同じ聲に出だして、まだ若けれど、をかしう謠ふ。簾の內より土器さし出づ。薫「醉の・進みては、忍ぶることもつつまれず、ひがごとするわざとこそ聞き侍れ。いかにもてない給ふぞ」と、とみに承け引かず。小袿かさなりたる細長の、人香懷しうしみたるを、取りあへたるままにかづけ給ふ。薫「何ぞもぞ」などさうどきて、侍從はあるじの君にうちかづけていぬ。引きとどめて・・・かづくれど、薫「水驛にて夜更けにけり」とて逃げにけり。少將は、この源侍從の君の、

**あぢきなうぞ**　怨みをいつたが、それは興ざましであつたの意。

**人は皆の歌**　あなた方は皆花のやうに美しい薫に心をお移しになるでせう。あなた方に見捨てられた私は春の夜の闇に迷つて居ります。

**折からや**　興を感ずるのも折によつてのものです。必ずしも薫君にのみ（香ばかりに）私共の心が移つたといふのでもございませぬ。

**見給へとおぼしう**　玉鬘にも見てくれとの積りらしく。

**竹河の**　昨夜竹河の歌で意中の片端をほのめかしましたが、私の深い思ひはお察し下さつたでせうか。姫君を許し給への意である。

かう（く）ほのめき寄るめれば、皆人これに（か）こそ心寄せ給ふらめ、わが身はいとどくんじいたく思ひ弱りて、あぢきなう（く）ぞ怨むる。

人は皆花に心を移すらむ獨りぞまど（よ）ふ春の夜のやみ

うち歎きて立てば、内の人の返し、

折からや哀も知らむ（ぬ）梅の花只かばかりに移りしもせじ

あしたに四位の侍從のもとより、あるじの侍從のもとに、「よべは、いと亂りがはしかりしを、人々いかに見給ひけむ」と、見給へとおぼしう、假名がちに書きて、端に、

竹河のはし打出でしひとふしに深き心の底は知りきや

と書きたり。寢殿にもて參りて、これかれ見給ふ。玉「手などもいとをかしうもあるかな。いかなる人、今より斯くととのひ給ふらむ。をさなくて院にもおくれ奉り、母宮のしどけなう（く）おほし立て給へれど、なほ人に（より）はまさるべきにこそはあめれ」とて、かんの君は、この君だちの手などあしき（怪）事を恥かしめ給ふ。



**げにいと若く**　「手などのあしき事を恥かしめ給ふ」の詞を受けて「げに」と言つたのである。

**竹河に**　あなたが早々お歸りになつたのも御尤もです、私方には何もあなたの御心のとまるやうな趣向もなかつたのですから。

**げにこのふしを**　歌の「ひとふしに深き心の」云々の詞を受けていふ。薫はこれをきつかけにして。

**氣色ばみ寄る**　姫君への思ひをほのめかす。

**近きゆかりにて**　薫と親しい間柄になつて朝夕仲よく交はりたいと思つた。

**咲く櫻あれば**　伊行釋引「櫻咲く櫻の山の櫻花散る櫻あれば咲く櫻あり」古今賀「櫻花散りかひくもれ老いらくの來むといふなる道まがふがに」

**姫君**　女子が數人ある場合長女を大君又は單に姫君といひ、次女を中君、以下三の君、四の君といふ。

**げにただ人にて**　三八六頁に「姫君をば更にただのさまにも思しおきてて給はず」とあつた詞を受ける。

返り（事）ごと（こ）げにいと若く（書く）、藤侍從「よべは水驛をなむ人々咎め聞ゆめりし。

竹河に夜を更かさじと急ぎしもいかなる節を思（に）ひおかまし

げにこのふしを初めにて、この君の御曹司におはして（つこ）、氣色ばみ寄る。少將の推し量りしもしるく、皆人心寄せたり。侍從の君も若き心地に、近きゆかりにて、あけくれ睦びまほしう（く）思ひけり。

彌生になりて、咲く櫻あれば散りかひ曇り、大方の盛りなるころ、のどやかにおはする所には、紛るる事なく、端近なる罪もあるまじかめり。その頃十八九の程（ばかり）にやおはしけむ、御かたちも心ばへも、とりどりにぞをかしき。姫君はいとあざやかにけだかう、今めかしきさまし給ひて、げにただ人にて見奉らば、似げなうぞ見え給ふ。櫻の細長、山吹などの、折にあひたる色あひの、なつかしき程にかさなりたる裾まで、愛敬のこぼれ落

**今一所** もうお一人の方は。中君の事。
**薄紅梅に** 御衣は薄紅梅で、御髪は。薄紅梅は中君が著てゐる御衣の色である。
**御ぐし色にて** 翡翠色などいふ説もあるが、要するに髪の毛色の美しい形容である。
**匂ひやかなる** 色合のよさは姉君は格別だと誰も思つてゐる。
**侍從の君** 藤侍從。姫君達の弟で、前にあるじの侍從とあつた人。
**けんぞ** 見證の字音。實地を見て批判する事。
**中將** 姫君達の兄弟で玉鬘の長男。後に兵衞督となる。
**宮仕のいそがしう** 宮仕の忙しさにこちらへ來る隙がなくてゐる間に、姫君達の信用を侍從に取られてしまつたのは殘念だ。

ちたるやうに見ゆる。御もてなしなども、らう／＼じう心恥しきけさへ添ひ給へり。今一所は、薄紅梅に、御ぐし色にて、柳の糸のやうにたを／＼と見ゆ。いとそびやかになまめかしう、澄みたるさまして、おもりかに心深きけはまさり給へれど、匂ひやかなるけはひは、こよなしとぞ人思へ・・る。碁打ち給ふとて、さし向ひ給へるかんざし御髪のかかりたるさまども、いと見所あり。侍從の君けんぞし給ふとて、近うさぶらひ給ふに、兄君たちさしのぞき給ひて、「侍從の覺え、こよなくなりにけり。御碁のけんぞ許されにけるをや」とて、大人々しきさましてついゐ給へば、お前なる人々、とかう居直る。中將、「宮仕のいそがしうなり侍る程に、人に劣りにたるは、いと本意なきわざかな」と憂へ給へば、「辨官はまいて私の宮仕怠りぬべきままに、さのみやは思し捨てむ」など申し給ふ。碁打ちさして恥ぢらひておはさうずる、いとをかしげなり。中將「うちわたりなどま





**故殿** 父君が生きてゐられたらと思はれる事が澤山あります。
**この御有樣どもを** 姫君達を見るにつけて、ぜひ亡父の素志通りにそれ／＼片つけてやりたいものだ、と中將は思つてゐられた。
**をさなくおはし** あなた方がまだ幼かつた時分、この花は自分のだといつて二人喧嘩なさつた事がありますが。
**いとさは** 私はそれと聞いて、格別泣いたりわめいたりはしませんでしたが、心の中では不平に思はれましたよ。
**あまたの人に** 多數の同輩に死におくれてしまつた身の上の嘆きも限りがありませぬ。
**人の婿になりて** 中將は今は人の婿であるから、いつもかうして落着いてわが家にゐられる事もないのだが、今日は花に引かれてゐられるのであつた。

かりありきても、故殿のおはしまさましかばと、思う給へらる る事多くこそ」など、涙ぐみて見奉り給ふ。二十七八の程に物し給へば、いとよくととのひて、この御有様どもを、いかで古へお・ぼしおきてしにたがへずもがな、と思ひ居給へり。お前の花の木どものなかにも、匂ひまさりてをかしき櫻を折らせて、「ほかのには似ずこそ・・」などもてあそび給ふを、「をさなくおはしまさうし時、『この花はわが・ぞ／＼』と爭ひ給ひしを、故殿は姫君の御花ぞと定め給ふ。うへは若君の御木と定め・・給ひしを、いとさは泣きのしらねど、・やすからず思ひ給へられしはや」とて、「この櫻の老木になりにけるにつけても、過ぎにける齢を思ひ給へ出づれば、あまたの人におくれ侍りにける身の憂へも、とめがたうこそ」など、泣きみ笑ひみ聞え給ひて、例よりはのどやかにおはす。人の婿・・になりて、今は心しづかにも・・見え給はぬを、花に心とめて物し給ふ。

かんの君（玉鬘）、斯く大人しき（左近中將などのやうな一廉の君達の親といはれる年のわりには）、人の親になり給ふ御年の程思ふよりは、いと若う清げに、なほ盛りの御かたちと見え給へり。冷泉（れいぜい）院の御門は、多くは（玉鬘の）この御有樣のなほゆかしう、昔戀しうおぼし出でられければ、何につけてかはと思しめぐらして、姫君の御事を、あながちに聞え給ふにぞありける。院へ參り給はむ（冷泉院へ姫君達をあげる事については）ことは、この君だち（中將等が）ぞ、「なほ物のはえなき心地こそすべけれ。よろづの事、時につけたるをこそ（時の勢力に從ふのを誰しも承認するやうに思ひます）世人も許すめれ。げにいと見奉らまほしき御有樣（院の）は、この世にたぐひなくおはしますめれど、盛りならぬ心地ぞするや。こと笛のしらべ、花鳥の色をもねをも、時に隨ひてこそ（時節々々で人の興味も引くものです）人の耳にもとまるものなれ。春宮はいかが」など申し給へば、玉「いざや、初めよりやんごとなき人の（夕霧の第一女）、かたはら（傍若無人）もなきやうにてのみ物し給ふめればこそ（といつたかたちで）、なかなかにてまじらはむは、胸痛く人笑はれなる事もやあらむとつつましければ（氣がねだから）。殿おはせましかば（鬚黒存生ならば）、行末の御宿世々々は（運不運はとにかく）知らず、只今

**多くはこの御有樣の**　今でも少からず玉鬘に御心引かれて、昔戀しく思はれるので、何かにかこつけてこの人に接近なさらうとするので、姫君の宮仕の事を強ひておすゝめになるのも多くはさうした意味であつた。

**なほ物のはえなき**　院へあげるのではもう一つ宮仕榮えがしないやうです。

**げにいと見奉らまほしき**　院は人もいふやうにお目にかかつてゐたいやうな御姿は此世に二人とはあるまいと思はれるお方ではいらつしやいますが、盛りはお過ぎになつたといふ感じです。

**春宮はいかが**　院へよりは春宮にあげては如何ですか。

**初めより**　春宮へは最初から右大臣の姫君といふ身分の高い方が御寵愛を獨占しておいでのやうですから、なまなかな宮仕は世間の物笑を招くやうな苦痛の種ですから。

**只今はかひあるさまに**　差當つては御奉公がひのあるやうに取計らつて下さるでせうに。



はかひあるさまにもてなし給ひてましを」など宣ひ出でて、皆物あはれなり。

中將（姫君達の兄）など立ち給ひてのち、君だち（姫君達）は、打ちさし給へる碁打ち給ふ。昔より爭ひ給ふ櫻を賭物（かけもの）にて、「三番に數一つ勝ち給はむ（三番の中一番勝越した者がこの櫻の持主といふ事にしませう）方に花を寄せてむ」と、たはぶれかはし聞え給ふ（姉妹が）。暗う（くら）なれば、端近うて打ち果て給ふ。御簾まきあげて、人々皆いどみ念じ聞ゆ。折しも例の少將（藏人少將）、侍從の君（玉鬘の三男）の御曹司に來たりけるを、打ちつれて出で給ひにければ（侍從は兄君達（中將と辨）と一緒に外出して留守だつたので）、大方人ずくなるに、廊の戸のあきたるに、やをら（少將は）寄りてのぞきけり。かう嬉しき折を見つけたるは、佛などのあらはれ給へらむに、參りあひたらむ心地するも、はかなき心になむ。夕暮の霞の紛れは（霞に遮られて）、さやかならねど、つくづくと見れば（じつと見つめて見ると）、櫻色のあやめ（櫻襲の衣裳によつて）もそれ（姉君と）と見分きつ。げに散りなむのちの（古歌の通り）形見にも見まほしく、匂ひ多く見え給ふを、いとど異ざまになり給はむ事（この人を他人のものにしてしまふのが一人つらい）、わびしく思ひまさる。若き人々（姫君の侍女達）

**昔より爭ひ給ふ櫻**　中將の噂した櫻。三九九頁。

**人々皆いどみ**　女房達は皆それぞれわが主人なる姫君の勝を祈りつつ見てゐる。

**かう嬉しき**　藏人少將の心。かうした嬉しい折に出くはしたのは、佛出現の世に參りあはせたやうな氣のするのも、なさけない心ではある。ぬか喜びになるかも知れないのに、それを嬉しく思つてゐるのを「はかなき心」といつたのである。

**櫻色のあやめも**　三九七頁に、「櫻の細長、山吹などの折にあひたる」とあつた。

**散りなむのちの**　古今春上「櫻色に衣は深く染めて著む花の散りなむ後の形見に」

の打解けたる姿ども、ゆふばえもをかしう見ゆ。右勝たせ給ひぬ。「高麗のらんざう遅しや」など、はやりかにいふもあり。「右に心寄せ奉りて、西のお前に寄りて侍る木を、左になして、年頃の御爭ひの、斯かればありつるぞかし」と、右方は心地よげにはげまし聞ゆ。何事と知らねど、をかしと聞きて、さしいらへもせまほしけれど、打解け給へる折、心地なくやは、と思ひて、出でていぬ。又斯かる紛れもやと、影に添ひてぞうかがひありきける。

君だちは、花の爭ひをしつつ明し暮し給ふに、風の荒らかに吹きたる夕つ方、亂れ落つるが、いと口惜しうあたらしければ、負けがたの姫君、

さくらゆゑ風に心のさわぐかな思ひぐまなき花と見る見る

御方の宰相の君、

咲くと見てかつは散りぬる花なれば負くるを深き怨とも見ず

**高麗の** 競馬の時に右方が勝てば高麗樂を奏するのが作法であるから戯れて斯くいつたのである。亂聲とは舞樂の最初に笛太鼓などで奏する樂。

**右方は心地よげに** 中君附の女房達は愉快げに勝利に景氣をつける。

**何事と知らねど** 少將はそれが何事とは知らないが面白く感じて、口出しもしたかつたが、皆が打解けてゐる折に、そんな事するのも心ない爲業と思つて其儘歸つた。

**さくらゆゑ** この花は私を負けさせた思ひやりのない花だと怨めしくは思ひながらも、風が吹けばやはり心配で氣が揉めます。

**咲くと見て** 咲いたかと思ふともう散つてゐる花だから、この木を取られてもさして恨めしくも思はれませせぬ。





と聞え助くれば、右の姫君、

風に散る事は世の常枝ながらうつろふ花をただにしも見じ

この御方の大輔の君、

心ありて池のみぎはに落つる花あわとなりても我方に寄れ

勝方の童べおりて花のしたにありきて、散りたるをいと多く拾ひて、もて參れり。

大空の風に散れども櫻花おのがものとぞかきつめて見る

左のなれき、

「櫻花匂ひあまたに散らさじと蔽ふばかりの袖はありやは

心せばげにこそ見ゆめれ」などいひおとす。

斯くいふに、月日はかなく過ぐすも、行末うしろめたきを、かんの殿はよろづにおぼす。院よりは、御消息日々にあり。女御、「うとうとしくおぼし隔つるにや。うへはここに聞えうとむるなめりと、いと憎げにおぼし宣へば、たはぶれにも苦

**風に散る** 花が、風に散るのは當り前の事ですが、枝の儘に私の物になつたのを御覽になつては恨めしい感じがなさらない譯にはいきますまい。「うつろふ」は散る意味と移る意味をかねてゐる。

**心ありて** 右方に贔屓して池の汀に散る花よ、泡と形を變じてもわが方へ寄れよ。古今春下「枝よりもあだに散りにし花なればおちても水の泡とこそなれ」

**大空の風に** どちらに味方するといふ事もなしに只空吹く風に散る櫻を、わが物と掻集めて眺めて居ります。

**櫻花** いくら櫻を自分の物になさつても、匂をよそへ散らすまいと其の花を包む程の袖はありますまい。上の歌と共に後撰春中の「大空に蔽ふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」を本歌とする。

**心せばげに** 花を獨占されるのは狹量のやうに思はれます。前の歌の「おのがものとぞ」の句を受ける。

**女御** 女一宮の母女御で弘徽殿と申す。致仕大臣の女で冷泉院の女御。

**うとうとしく** 他人行儀な、私に氣がねしてゐられるのか。

**さるべきにこそは**　これも姫君の運命なのだらう、斯樣に生憎な（寧ろ邪魔して下されば と思ふのに）御言葉であるにつけても畏多い。常の感情からは絶對に反對されるべき女御からも御催促のあつた事を恐縮するのである。

**聞き煩ひ給ひて**　少將に泣きつかれて雲居雁から玉鬘へ哀願の文を送るのである。

**いと傍痛きこと**　姫君を戴きたいなどとお願ひの出來る身分ではないがと卑下の詞。

**推し量りて**　私の心を御推察下さつて、氣の安まるやうにお取計らひ下さい。

**院よりわりなく**　院から無理にもとの御所望がございましたので。

**慰め聞えむ**　お氣の安まるやうな方法を講ずるのを見て戴くのが外聞も穩便でございませう。

しうなむ。同じく(う)は、此頃の程におぼし立ちね」など、いとまめやかに・・・・(そそのかし)聞え給ふ。さるべきにこそはおはすらめ、いと斯うあやにくに宣ふも・・(いと)忝し、など思し・・・・(立ちにけ)たり。御調度などは、そこらしおかせ給へれば、人々の・(御)裝束、何くれのはかなき事をぞ急ぎ給ふ。これを聞くに、藏人の少將は死ぬばかり思ひて、母北の方を責め奉れば、聞き煩ひ給ひて、雲居「・(斯)く・いと傍痛きことにつけて、ほのめかし聞ゆるも、世にかたく(な)なしき闇の(惑)迷ひになむ。おぼし知る方もあらば、推し量りて・・(む)、なほ慰めさせ給へ」など、いとほしげに聞え給ふを、苦しうもあるかな、と打歎き給ひて、玉「いかなる事と思う給へ定むべきやうもなきを、院より・・(いと)わりなく宣はするに、思ひ給へ・亂れてなむ。まめやかなる御心ならば、この程をおぼししづめて、慰め聞えむさまをも見給ひてなむ世の聞えもなだらかなら(には)む・・(べき)」など申し給ふも、この御參り過ぐして、中の君をとお



**さし合せては**　二人一緒に（姉君の院參と中君を少將へと）片附けてはあまり得意さうでよくなからう。

**あさへたる**　「淺し」と同語根の動詞で連用形のみを用ひる。

**いかならむ折に**　よい機會があつたらわが物にしようと。

**頼みかからず**　取附きもなくなつてしまつた事を。

**かひなき事も**　言うても詮のない繰言もいひたくて。

**さなめりと見て**　薫の文と見て取つて奪ひ取つた。

**事ありがほにや**　侍從は見せまいとするのも子細ありげに見えるので強ひても隱さない。

**つれなくて**　惜しむ人の心も顧みずに月日は過ぎて春の暮になつてしまつた、恨めしい事だ。

**人はかうこそ**　以下薫の文を見ての少將の心。他人はよくもこんなにあせらずに體裁よくしてゐて怨みが述べられたものだ。

**わがいと人わらはれなる**　一つは自分がをかしい程やきもきしてゐるので、人には馴れこになつて却つて莫迦にされるやうになつてしまつたのだ。河内本は本の儘。

**例語らふ**　いつも文の取次を頼む。

ぼすなるべし。さし合せては、うたてしたりがほならむ、まだ位などもあさへたる程を、など思すに、男は、更にしか・思ひ移るべくもあらず、ほのかに見奉りてのちは、面影に戀しう(く)、いかならむ折にとのみ覺ゆるも(に)、(く)かう頼みかからずなりぬるを、思ひ歎き給ふこと限りなし。

かひなき事もいはむと・・(思ひ)て、例の侍從の曹司に來たれば、源侍從の文をぞ・(よ)見居給へりける・(こ)。引き隱すを、さなめりと見て、うばひ取りつ。事ありがほにやと思ひて、いたうも隱さず。そこはかとなくて、・ただ世を怨めしげにかすめたり。

つれなくて過ぐる月日を數へつつ物怨めしき暮の春かな

人はかう・(く)こ・そのどやかに、さまよくねたげ(う)・・・(にこそあ)なめれ、わがいと人わら(ろ)はれなる心いられを、かたへは目馴れてあなづりそめられにたる・(を)、と思ふも胸痛ければ、ことに物もいはれで、例語らふ中將のおもとの曹司の方に行くも、例のかひあらじか

**この御返りごと**　一寸失禮してこの手紙の返事を書いて來ます。

**いと腹立たしうやすからず**　下の「覺えける」に係る。

**あさましきまで**　少將が中將のおもとに對して。

**前申し**　取次。媒介者。

**さばかりの夢をだに**　あゝした夢のやうな垣間見でもいゝから、もう一度したいものだ。

**かう聞ゆる事も**　かうしてあなた方と話をするのも、もう暫くの間だと思はれるから、冷遇を受けるのも思出の種だ、とは本當の事だ。

**つらきもあはれと**　新古今戀五、深養父「うれしくは忘るる事もありなましつらきぞ長きかたみなりける」此歌の心であらう。

**あはれとて**　以下中將のおもとの心。いくら氣の毒でも爲方のない事だ、玉鬘が中君を代りに立てて慰めてあげようとなさるのに。

**けんぞう**　顯證の字音。あらはな事。

**聞召させたらば**　隙見遊ばした事を申上げましたら、何といふ不心得なと、一入お嫌ひ遊ばす事でございませう。

し、と歎き（少將が）がちなり。侍從（藤侍從）の君は、「この御返りごと（事・こ）せむ」とて、うへ（玉鬘の方へ）に參り給ふを見るに、いと腹立たしう（少將は）やすから（不快に）ず、若き心（少將の）地には、偏へに物ぞ覺えける。あさましきまで恨み歎けば、この前申し（中將のおもと）も、あまりたはぶれ（冗談氣分であしらふ事）にくく（も出來ず氣の毒になつて）いとほしと思ひて、いらへもをさ〳〵せず。かの御碁のけ（見）んぞ（證）せし夕暮のこともいひ出でて（少將が）、「（少將）さばかりの夢をだに又見てしがな。あはれ、何を賴み（あてどに）にて生きたらむ。かう聞ゆる事も、殘りすくなう覺ゆれば、つらきもあはれといふ事こそ誠なりけれ」と、・・（いと）まめだちていふ。あはれとて、・・・（いかに）いひやるべき方なき事なり、かの慰め給はむ御さま、露（少將は）ばかり嬉しと思ふべき氣色もなければ、げにかの（こ）夕暮の（圍碁の）・・（碁の）けんぞうなりけむに、（少將が姬君をあらはに・見られたので一段とかうした無茶苦茶な料簡が起つたのだらう）いとど斯うあやにくなる心は添ひたるならむと、ことわりにおもひ（ほえ）て、「（中將）聞召させ（玉鬘に）たらば、いとどいかにけしからぬ御心（少將の）なりけりと、うとみ聞え（玉鬘があなたを）給はむ。心苦しと思ひ聞えつる（あなたをお氣の毒と思つた私の心も）心も失せぬ。



**むかひ火つくれば**　こちらから逆襲すると。さかねぢをくはせると。卷三、一八七頁。

**さばれや**　遮莫。そんな事はどうでもよい。

**おいらかに召寄せで**　おとなしく私をお呼びよせになつたらよかつたに、さうなさらないで。

**いでやなぞ**　私のやうな數ならぬ身に自由にならないのは、負けじ魂です。何の因果でせう。姬君の院參を嘆いたのである。

**わりなしや**　碁は强い方が勝つにきまつた事で、あなたのお心一つでどうにもなりませぬ。お恨みを受けては當惑します。「强き」は勝ち負けと共に圍碁の緣語。

**哀とて**　私の生き死にはあなた次第なのです、同情して姬君にあはせて下さい。「我身とならば」は私と勝負するのならばの意。「手をゆるす」は待つたする事で、生き死にと共に圍碁の緣語。

**院の聞召す**　院の手前もある事故、玉鬘が院に氣兼ねをして、沚もこちらの申入れはあぶながつて聞き届けてはくれまいと思つたので、面會の折にも言ひ出さなかつたのが殘念です。

いとうしろめたき（油斷のならぬお方でございますね）御心なりけり」と、むかひ（へ）火つくれば、「（少將）いでや・、さばれや（れはよ）。今は限りの身（我身故）なれば、物怖ろしくもあらずなりにたり。さても負け（姬君が碁に）給ひしこそ、いといとほしかりしか。おいらかに召寄せで・・（入れでやは）。めくはせ奉らましかば（目くはせで助言したら申分はなかつたでせうに）、こよなからましものを」などいひて、

（藏人少將）いでやなぞ數ならぬ身にかなはぬは人に負けじ（碁の緣語）の心なりけり

中將うち笑ひて、

（中將）わりなしや强き（姬君が院に參られる事）によらむ勝ち負けを心一つにいかが任する

といらふるさへぞつらかり（少將の心に）ける。

（藏人少將）哀とて手をゆるせかし生き死にを君に任する我身とならば

泣きみ笑ひみ語らひあかす。

又の日は卯月になりにければ、はらからの君だち（夕霧の息で少將の兄弟）の、・うち（禁中）に參りさまよふに、いたう（少將は）くつ（屈）し入りて眺め居給へれば、母北の方（雲居雁）は、淚ぐみておはす。おとど（父大臣夕霧）も、「院（冷泉院）の聞召すところもあるべし、

何に・かは・あぶな〳〵聞き入れむとおもひて、くやしう對面のついでにも打出で聞えずなりにし。みづからあながちに申さましかば、さりともえたがへ給はざらまし」など宣ふ。さて例の、

花を見て・春は暮しつ今日よりや繁きなげきのしたに惑はむ

と聞え給へり。御前にて、これかれ上﨟だつ人々、この御懸想人の、さま〳〵にいとほしげなるを、聞え知らするなかに、中將・おもと、「生き死にをといひしさまのことにのみはあらず、心苦しげなりし・」など・聞ゆれば、かんの君も、いとほしと聞き給ふ。おとど北の方のおぼす所により、せめて人の御恨み深くば、と、取りかへありておぼすこの御參りを、妨げやうに思ふらむはしも、めざましきこと。限りなきにても、ただ人にはかけて・あるまじきものに故殿のおぼしおきてたりしものを、院に參り給はむだに、行末のはえ〳〵しからぬを・、おぼしたる折しも、この御文取り入れてあはれがる。御返し、

**花を見て**　藏人少將の歌。春の間は花を眺めて樂しく暮して來たのですが、今日からは夏になつたから繁き夏木立の下に嘆きながらまごついてゐる事でせう。花は姬君。

**生き死にを**　少將が生き死にをと仰しやつたのは、口先だけでなく眞實死にかねない程の御執心故。

**おとど北の方の**　御兩親（夕霧と雲居雁）の手前、少將がたつて所望するならばと、代りの人を定めてのこの今度の御宮仕を、邪魔しようとするのは心外な事だ、いくら高貴の方でも平人には決して縁付けまいといふのが故人の遺志であつたのだもの。

**行末の**　院では將來が輝かしくもないといふことを。



今日ぞ知る空を眺むる氣色にて花に心をうつしけりとも

「あないとほしき。たはぶれにのみも取りなすかな」などいへど、うるさがりて書きかへず。

九日にぞ參り給ふ。右の大殿・・、御車、御前の人々あまた奉り給へり。北の方も怨めしと思ひ聞え給へど、年頃もさもあらざりしに、この御事ゆゑ・繁う聞え通ひ給へるを、又かき絶えむもうたてあれば、かづけ物ども、よき女の裝束・あまた奉れ給へり。「怪しううつし心もなきやうなる、人の有樣を、見給へあつかふ程に、承りとどむる事もなかりけるを、驚かせ給はぬも、うと〳〵しくなむ・・・・」とぞあり・ける。おいらかなるやうにてほのめかし給へるを、いとほしと見給ふ。おとども御文あり。「みづからも參るべきと思う給へつるに、つつしむ事の侍りてなむ。をのこども、雜役にとて參らす。うとからず・・・召し使はせ給へ」とて、源少將、兵衞の佐など奉

**今日ぞ知る**　あなたはいつも物思ひありげに大空を眺めていらつしやいましたが、それは只うき〳〵と花に心を引かれての事でございましたね、今日始めて分りました。少將の「花を見て春は暮しつ」の歌を受けていふ。「たはぶれにのみ取りなすかな」と敬語を用ひてない點「うるさがりて書きかへず」とある點などから「今日ぞ知る」の歌は玉鬘自作でない事が察せられる。古今戀四「大空は戀しき人の形見かは物思ふごとに眺めらるらむ」を踏む。

**右の大殿**　玉鬘の兄妹故世話するのである。

**年頃もさも**　年來あまり親しくもしてゐなかつたのを、少將の事で繁く文通もしたのに、又絶緣するのもいやだから。

**怪しううつし心も**　少將が妙に氣が抜けたやうになつて居りますので、それを介抱して居ります間、御用を承る事も致しませんでしたが、あなたから言ひつけて下さらないのも、隔てがましくて存じます。

**をのこども**　子どもを何かの御用にもと思つて差出します。御遠慮なくお使ひ下さい。

**なさけは**　御深切ありがたう存じます。

**いづ方につけても**　紅梅大納言は玉鬘の兄弟であり、院參の姫君は、眞木柱と異腹の姉妹である。

**藤中納言はしも**　然るに眞木柱と同腹の藤中納言は自身やつて來て。

**あはれとおもふとばかり**　姫君のお口から、お氣の毒な、とせめて一口なりと仰しやつて頂けば、それに命も繋がれて、暫くでも生きのびられるかも知れませぬ。

**いといたうくつし**　沈みこんで居られた。その理由はすぐ次に叙してある。

**中の戸ばかり**　仕切の戸一枚を隔てて西と東に別れてゐたのをさへ氣が濟まなくて互に往來してゐられたのに。

---

れ給へり（る）。玉「なさけはおはすかし」と（お禮を申される）悦び聞え給ふ。（紅梅）大納言殿よりも、（女房達の）人々の御車奉れ給ふ。（紅梅の）北の方は故（髭黑）おとどの御むすめ、（玉鬘の繼子）眞木柱の姫君なれば、いづ方につけても、睦まじう聞え通ひ給ふべけれど、（互の音問もある筈だが）さしもあらず（眞木柱からは消息がない）。藤中納言はしも、みづからおはして、（玉鬘の實子）中將、辨の君たち、諸共に事行ひ給ふ。（髭黑）殿のおはせましかばと、よろづにつけて（人々の心に）あはれなり。藏人の・・（少將の）君、例の人に（中將のおもとに）、（切なる情を言葉の限り認めて）いみじき言葉を盡して、文「今は限りと思ひはべ（つ）る命の、（死ぬ覺悟はし）さすがに（たものの）悲しきを、『あはれとおもふ』とばかりだに一言（ひとこと）宣はせば、それにかけとどめられて、暫しもながらへやせむ」などあるを、（中將が）もて參りて見れば、（姉妹）姫君二所打語らひて、いといたうくつ（ん）し給へり。（姫君達は今迄始終一緒に居馴れて）夜晝もろともにならひ給ひて、中の戸ばかり隔てたる、西ひんがし・・（の程）をだにいといぶせきものにし給ひて、かたみに渡り通ひ・・（つこ）おはす・・（しつ）るを（に）、（これからは別れ〳〵に）よそ〳〵にならむ事を（と）思すなりけり。（念を入れて化粧してあげた姫君の御姿）心殊にしたて引きつくろひ奉り給へる御・・（あり）さま、いとを



**殿のおぼし宣ひし**　髭黑の素志は主上へとあつて院へとは思はなかつたのだから。

**おとど北の方の**　以下姫君心。

**哀てふ**　少將の文の「あはれと思ふとばかりだに一言宣はせば」を受けた歌。無常なこの世ですもの、あはれといふ言葉は、誰の身の上にもいはれる事で、特に或る一人に對していふべき言葉とも知りませなんだ。

**ゆゆしき方にて**　併しいふのも忌はしい「限り」といふ意味に於て（今日を限りと院參する點で）ぼんやり分りました、即ちあはれといふ言葉は私に云つてもらふ言葉でした。

**やがて**　中將のおもとは書きかへずに姫君の認められたのを其儘少將に贈られたので。

**折をおぼしとむる**　この時期を胸において云つてあるのまでも。今日院に參るのでこれが最後といふ意味もあるから。

**たが名は立たじ**　古今戀二「戀ひ死なば誰が名は立たじ世の中の常なきものといひはなすとも」こゝは「誰が名は立たじ」の意味を引用したのではない。引歌の意味を引く時は其引かうとする意味は隱すものである。それ故こゝでは「世の中の常なきもの」とこの意味をきかせたので「あなたは無常はこの世の定めだ」と一般の事のやうに仰しやるが、私の死はあなた故であつて世の無常といふ定めによるも

---

かし。殿のおぼし宣ひ・し（はせ）さまなどを思し出でて、物あはれなる折からにて、（少將の文を姫君が）取りて見給ふ。（夕霧と雲居雁とが）おとど北の方・・（など）の、（少將はあのやうに）さばかり（兩親揃つて）立ち並びて、（將來を保障されてゐるやうな身の上で）頼もしげなる御中に、（とりとめもない「死ぬ」などいふ事を）など斯うすずろごとを思ひいふらむ、と（姫君の心に）怪しきにも、（少將の文に「今は限りと」とある事）「限り」とあるを、（本當に死ぬのか）誠にやとおぼして、やがてこの御文の端に、

（姉君）「哀てふ常ならぬ世の一言（ひとこと）もいかなる人にかくるものぞは

ゆゆしき方にてなむ、ほのかに思ひ・しりたる（わ）」と書き給ひて、

（姉君）「（右の事を別の紙に認めてやりなさい）かういひやれかし」と宣ふを、（中將のおもとに）やがて（少將に）奉れた・・（りけ）るを、（少將は）限りなう（く）珍らしきにも、折をお・（も）ぼしとむ・（しりけ）るさへ、（少將は）いと涙もとどまらず。（折返して）立ちかへり、（少將）「たが名は立たじ」など、かごとがましくて、

（藏人少將）「生ける世の死（しに）は心にまかせねば聞かでややまむ君が一言

（私の死後にあはれと仰しやつて下さるだけの御好意を持つて居て下さると信ずる事が出來ますならば）塚の上にも懸け給ふべき御心の程と思ひ給へましかば、ひたみちにも（死の旅も）急がれ侍らましを」などあるに、（あんな返事をしてわるい事をした）うたてもいらへをして

のではないと云ひがかりめいた事を書いての意。**生ける世の歌** あなた故に死ぬ身だから、あはれと一言いつて戴きたいのですが、勝手に死ぬ事は出來ませんから、結局あなたからあはれといふ詞を聞かずに終るのでせうか。**塚の上に** 史記世家「呉季札呉王壽夢季子也、初使レ北過二徐君一、徐君好二季札劍一、口弗二敢言一、季札心知レ之、爲レ使二上國一未レ獻、還至レ徐、徐君已死、乃解二其寶劍一、懸二徐君冢樹一而去、從者曰、徐君已死、尙誰予乎、季子曰、不レ然、始吾心已許レ之、豈以レ死倍二吾心一哉」**后女御など** 后や女御など皆入內後年月を經て年もふけてゐられたのに、この姬君は大層かはいく若盛りの見ばえのするお方だから、それを御覽になる冷泉院が何で疎略に思召さう。**ただ人だちて** 院が臣下の人々と同じやうに氣輕に取扱つて下さるので、姬君は入內よりも却つて理想的な結構な御有樣であつた。「げに」とは、禁中には明石中宮がゐられるから、なまなか入內して冷過されるよりも院參を玉鬘は希望して居つたからである。**かんの君をしばし** 院は玉鬘が當分院に居てくれるやうに熱望しておいでになつたのだが。

けるかな、（書きかへずにあの侍中將のおもとがやつたらしい）書きかへでやりつらむよ、と（姬君は）苦しげにおぼして、物も宣はずなりぬ。（女房）大人、童（などはよしありて）・・・・・・・、めやすき限りを（姬君の附添として）とゝのへられたり。（院參の）大方の儀式などは、（入內の儀式と大差はない）うちに參り給はましに變ることなし。（玉鬘は姬君に附添つて參つたのだがまづ弘徽殿女御の所へ行かれてお話などなさる、弘徽殿は玉鬘の）まづ女御の御方にわたり給ひて、かんの君は御（異母姉妹）物語など聞え給ふ。夜更けてなむ（玉鬘の姬君が冷泉院へ）うへにまうのぼり給ひける（り）。（秋好）后、（弘徽殿）女御など、・・皆年頃經てねび給へるに、（玉鬘の姬君は）いとうつくしげにてさかりに見所ある・（御）さまを見奉り・・給ふ・（に）は、などてかはおろかならむ、（姬君は）花やかに時めき給ふ。ただ人だちて、心やすくもてなし給へるさましもぞ、げにあらまほしう（く）めでたかりける。かんの君を、しばし・（は）さぶらひ給ひなむと、（御）・心とどめて（きめきこ）・思し・（め）・（し）けるに、（玉鬘は）いと疾くやをら（歸邸）出で給ひにければ（り）、・・（いと）（院は）口惜しう（く）心憂しとおぼしたり。

（薫）源侍從の君をば、（冷泉院が）あけくれお前に召しまつはし（と）つつ、げに只・昔の光る源氏の生ひ出で給ひしに劣らぬ、（薫）人の御覺えなり。（薫は院中）院の





**この御方にも** 薫はこの姬君にも好意を寄せてゐるやうに見せかけて、實は姬君が自分をどう思つてゐられるかを探らうとする心までも動いてゐた。**かの御方の** 姬君の御殿のお庭の手近に見える五葉の松に藤がからまつて面白く咲き垂れてゐる景色を。**まほにはあらねど** 姬君の事をあらはには言はないが。**手にかくる** 思ふ儘になるものならば、姬君をよそのものにして見ては居るまいに。藤の花を藤浪といふところから「松よりこゆる」と續けたのである。古今東歌の「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」によつて詠んだ歌。「松よりこゆる」とある河內本に從はなければならぬ。**わが心にあらぬ** 侍從は姉君を薫へと思つてゐたのである。**紫の色はの歌** 姉君は私の同胞ですが、私の勝手にはなりませぬ。古今雜上の「紫の一本ゆゑに」の歌の心がある。**かの少將の君はしも** 「しも」の字味ふべきである。薫も殘念がつてゐるが少將と來ては、と少將の一層切な嘆きを敍するのである。

（の誰とも隔てなく馴染み親しんでゐられる）うちには、何れの御方にもうとからず、馴れまじらひありき（る）給ふ。（玉鬘の姬君）この御方にも、心寄せありがほにもてなして、（した）下には、いかに見給ふらむの心さへ添ひ給へり。夕暮のしめやかなるに、（玉鬘の子）藤侍從と（薫が院內を）連れてありくに、（こ）かの御方のお前近く見やらるる五葉（えふ）に、藤のいと面白く咲きかかりたるを、（泉水の）水のほとりの石に、苔をむしろにて（薫と侍從が）眺め居給へり。まほにはあらねど、（女との關係がおもしろくない）世の中怨めし（やうに）げにかすめつつ（薫が侍從に）語らふ。

（薫）手にかくる（か）物にしあらば藤の花松よりまさる（こゆ）（こゆるイ）色を見ましや

とて、花を見あげたる（薫の）氣色など、（侍從は妙に同情に堪へなくて氣の毒に思はれるが）怪しくあはれに心苦しくも・お・もほゆれば、（姉の院參は自分の本意ではない）わが心にあらぬ世の有樣に（を）ほのめかす。

（藤侍從）紫の色はかよへど藤のはな心にえこそまかせ（かから）（か、らイ）ざりけれ

（藤侍從の人柄）まめなる君にて、（薫に對して）いとほしと思へり。（薫は）いと心惑ふばかりは（姬君を）思ひい・（ら）れざりしかど、（院參を）口惜しう（く）は覺えけり。

（藏人少將）かの少將の君はしも、まめやかに、（身の振方に窮して）いかにせましと、（間違ひも引きおこ）過ちもし

**少將の君をば**　玉鬘は雲居雁の恨みを恐れて、中君を少將に許さうと思つて其旨を仄めかしたが。

**かの君だち**　夕霧の子息達。

**うちには**　主上は故大臣が姉君を禁中に差上げようといふ特別の素志であつたのに、その遺志に背いて院參した事を、どうした譯かと思召して。

**さればこそ**　だから、あの時も、姫君を院にあげては世間でも不審に思ふだらうと私が申しましたのに、母上はお考が私とは違つて、あのやうに取計らつておしまひになつたので、私は何とも申せないで居りますが、主上からあゝした仰せのありますのは、私共の爲にもおもしろくない事です。

つべく、しづめむかたなくなむ覺えける。聞え給ひし人々、中の君とうつろふもあり。少將の君をば、母北の方の御怨みにより、さもやと思ほして、ほのめかし聞え給ひしを、絶えて音づれずなりにたり。院には、かの君だちも、親しくもとよりさぶらひ給へど、この參り給ひてのち、をさ〳〵參らず、まれ〳〵殿上の方にさしのぞきても、あぢきなう、逃げてなむまかり出でける。

うちには、故おとどの心ざしおき給へるさま殊なりしを、斯く引きたがへたる御宮仕を、いかなるにかと思して、中將を召してなむ宣はせける。「御氣色よろしからず。さればこそ『世人の心のうちも、かたぶきぬべき事なり』と、かねて申し事を、おぼし取る方異にて、かう思し立ちにしかば、ともかくも聞えがたくて侍るに、斯かる仰言の侍るは、なにがしらが身の爲も、あぢきなくなむ侍る」と、いと物しと思ひて、かんの君を申し



**只今から俄にしも**　私だつてさう急にとは思つて居なかつたのですが、院からお氣の毒な程強ひて仰しやるので。

**誰も〳〵**　もし不都合な事があつたら、誰なりとその當座にありの儘にいつてとめて下さればよいのに、さうもなさらずに、今になつてから急に右大臣も、あれが私の考であつたやうに仰しやるので、私は困つてしまひます。

**その昔の**　母上の仰しやる前世の因縁などといふものは目に見えないものですから、主上がああ仰しやるのに對して、主上には御縁がなかつたのだなどと辯解は出來ませぬ。

**中宮を憚り聞え**　中宮に遠慮して主上へはあげないと仰しやいますが、それでは院の女御をどうなさらうと思召すのですか。

**後見や何やと**　後の爲を思つて、豫備工作として、院の女御を後見とか何とかいつてお力になさつてゐられても、いつまでもさうはいきますまい。姫君に院の御心が移つたら弘徽殿と御仲がよくゐられる筈がないから。

給ふ。「いざや、只今かう俄にしも思ひ立たざりしを、あながちにいとほしう宣はせしかば、後見なきまじらひの、うちわたりははしたなげなめるを、今は心やすき御有樣なめるに、まかせ聞えてと思ひ寄りしなり。誰も〳〵、びんなからむ事は、ありのままにも諫め給はで、今引きかへし、右のおとども、ひが〳〵しきやうにおもむけて宣ふなれば、苦しうなむ。これもさるべきにこそは」と、なだらかに宣ひて、心もさわがい給はず。「その昔の御宿世は、目に見えぬものなれば、かう思し宣はするを、これは契り殊なるとも、いかがは奏しなほすべき事ならむ。中宮を憚り聞え給ふとて、院の女御をば、いかがしさしも奉り給はむとする。後見や何やと、かねて思しかはすとも、さしもえ侍らじ。よし見聞き侍らむ。よう思へば、うちは中宮おはしますとて、他人はまじらひ給はずや。君に仕うまつる事は、それが心やすきこそ昔より興あることにはしけれ。

女御は、聊かなる、事のたがひ目ありて、よろしからず思ひ聞え給はむに、ひがみたるやうになむ世の聞き耳も・侍らむ」など、二所して申し給へば、かんの君、いと苦しとおぼしぬ・。さるは限りなき御思ひのみ月日に添へてまさる。七月より孕み給ひにけり。うち悩み給へるさま、げに人のさま〴〵に聞え煩はすも、ことわりぞかし。いかでかは斯からむ人を、なのめに見聞き過ぐしてはやまむ、とぞ覺ゆる。明暮御遊びをせさせ給ひつつ、・侍從もけぢかう召し入るれば、御ことのねなどは聞き給ふ。かの「梅が枝」に合せたりし中將のおもとの和琴も、常に召し出でて彈かせ給へば、聞きあはするにも、・・ただには覺えざりけり。

その年返りて男踏歌せられけり。殿上の若人どものなかに、物の上手多かる頃ほひなり。そのなかにも、すぐれたるをえらせ給ひて、この四位の侍從、右のか・とうなり。かの藏人の少將

**女御は聊かなる** もし一寸した行違があつて女御がおもしろく思召すやうな事がありましたら、世間ではそれをひがんでいらつしやるやうにおもふでせう。院の女御は玉鬘の異母姉妹故、今度の姫君とは叔母姪の間柄である。

**二所** 中將と辨と。何れも玉鬘の息。

**さるは** そんなうるさい話もあつたが。

**いかでかは** どうしてこんな美人をただに置けるものぞと頷かれる。

**かの梅が枝に合せ** 正月二十日頃の事。三九三頁。

**ただには覺えざりけり** 薫は心を動かさずにはゐられなかつた。

**その年返りて** 薫十七。

**男踏歌** 卷三初音卷の一四頁參照。

**かとう** 歌頭。踏歌の折の音頭取で、右の歌頭は右近中將が勤める。薫は匂宮卷に右近中將になつた。三五三頁五行。河内本は樂頭の意。





・、樂人のかずのうちにありけり。十四日の月の・花やかに曇りなきに、お前より出でて冷泉・院にまゐる。女御もこの御息所も、うへに御局して見給ふ。上達部親王達・・引きつれて參り給ふ・。右の大殿・、致仕の大殿・の・族を離れて、きらきらしう・清げなる人はなき世なりと見ゆ。うちのお前よりも、この院をばいと恥かしうことに思ひ聞えて、皆人用意を加ふるなかにも、藏人の少將は、見給ふらむかしと思ひやりて・、靜心なし。匂ひもなく見苦しき綿花も、かざす人がらに見分かれて、さまも聲もいとをかしくぞありける。「竹河」謠ひて、御階のもとに踏み寄る程、過ぎにし夜のはかなかりし遊びも思ひ出でられければ、ひがごともしつべくて、涙ぐみ・けり。后の宮の御方に參れば、うへもそなたに渡らせ給ひて御覽ず。月は夜ぶか・うなるままに、晝よりもはしたなう澄みのぼりて、いかに見給ふらむとのみ覺ゆれば、踏む空もなうただよひありきて、

**この御息所** 玉鬘の姫君。去年七月から姙娠してゐられるが、まだお生みにはならない。が、此處に初めて御息所といふ。

**右の大殿** 右大臣と致仕大臣の一族以外には。

**うちのお前よりも** 人々は主上のお前よりも院のお前を恥かしく格別に思つて氣をつけてゐるのだがその中でも。

**綿花** 踏歌の折には綿で作つた花を冠にかざす。

**竹河** 催馬樂。踏歌の折には竹河を謠ふ。卷三、一五頁。

**過ぎにし夜の** 去年正月二十日夜玉鬘方での事。

**晝よりもはしたなう** あまりあかるすぎて顔を見られるから。

**いかに見給ふらむと** 姫君が自分を見て何と思はれる事だらうと思ふと少將は舞踏する氣もどこへやら、足のふみども夢うつつで。

**盃もさして一人をのみ**　踏歌には飯驛と水驛とがあつて、踏歌の人々を饗應する。少將は盃をさされても自分一人を目がけてさされるやうに思はれてきまりわるかつた。

**かとう**　歌頭。河内本は樂頭。

**ばんずんらく**　踏歌の折に謡ふ八句の詩で、一句ごとの末に必ず萬春樂と唱へる。卷三「一七頁」。

**里人**　女房達の實家の人々が大勢御息所方に集つてゐるので、いつもよりも花やかで何となく景氣がいゝ。

**一夜の月影は**　昨晩はあまり月があかるすぎてきまりがわるい程でしたよ。

**月の光に輝きたりし**　藏人少將が月の光を浴びたところは。

**桂の影に**　少將の光り輝いたところも月の光にも恥ぢないもののやうであつた。細流抄「はづる或本侍るとあり少將は美男なれば桂男にもはづべきにてはなけれど此、院中にては左程も見えざると也、說々あれども此義を用る也」とある。併し桂の影はたゞ月の光と見るが穩かであらう。

**闇はあやなきを**　古今春下「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るる」いくら香のよいあなたでも、「闇」の夜では一向つまりませんが、月影で引立つた昨夜のお姿は、少將よりも一段美しい、と皆で噂致して居りました。

盃（に）・もさして一人をのみ咎（しき）められるるは、面目（めいぼく）なくなむ。

夜一夜所々にかきありきて（駈けめぐつて）、いと惱ましう苦（く）しくて臥したるに、

源侍從を院より召したれば、（薫・冷泉院から）薫「あな苦し。暫し休むべきに」と、

むつかりながら（ぶつくいひながら）參り給へり。（院へ）御前の事どもなど問はせ給ふ。（今日の内裏の踏歌の様子などを院が薫にお尋ねになる）冷泉「か

（く）・とうはうち過ぐしたる人の（老年の人が勤める先例だのに）先々（さきざき）するわざを、えらばれたる程、（若いあなたが選ばれたのは）

心にくかりけり」とて、うつくし（薫をかはゆく）と思したり。「ばんずんらく（萬春樂）」

・を御口ずさび（み）にし給ひつつ、（冷泉院が）御息所（玉鬘の姫君）の御方に渡らせ給へれば、

御供に參り給ふ。（薫が院の）物見に（踏歌見物に）參りたる里人多くて、例よりも花やか

に、けはひ今めかし。渡殿の戸口に暫し居て、（薫は）聲聞き知りたる

人・に、（女房（々））物など宣ふ。（薫が）薫「一夜の月影は、はしたなかりしわざか（あかるくてきまりの悪い思ひをした）

な。藏人の少將の月の光に輝きたりし氣色も、桂の影に恥づる

にはあらずやありけむ。雲の上近くては、さしも見えざりき（けり）」（院中ではそれ程美しいとも思ひませんでしたが）

など語り給へば、人々あはれと聞くもあり。（御息所の女房達は少將に同情して）・（け　り）・○女房等「闇はあやな

きを、月ばえ（は）・今すこし心殊なりと（定　め）・聞えし」などすかして、（薫を慰撫して）





**竹河のの歌**　玉鬘の方で竹河をお謡ひになつた夜の事は覺えていらつしやいますか、格別思ひ出になる事はございませんでしたが。

**流れての**　あの頃は行末に望みもあつたが、それも空しくなつたので、あの竹河で世の憂さがしみじみと分つた。「流れ」は河の緣語。

**うち出で過ぐす**　長居して居て言はんでもよい事まで言ひ過ぎては困る。

**踏歌のあしたに**　初音卷一七頁には、後宴の折女樂を催す爲に樂器を用意した事だけ記してあるが、此處の文によつて、その折女樂が催された事は明かである。

內より、（簾中から）

女房　竹河のそのよの事は思ひいづや偲ぶ許りの節はなけれど（竹の縁で夜に節をひゞかせたもの）（竹の縁語）

と・（い　ふ）・はかなき事なれど、（何でもない事だがこの歌を聞いて薫は涙ぐましくなる）涙ぐまるるも、げにいと淺くは覺え（あ　ら）（玉鬘の姫君を）

ぬ事なりけりと、みづから（薫自身）・（も）・思ひ知らる。

薫　流れての賴め空（み）しき竹河に世は憂きものと思ひ知りにき（竹の縁語）

ものあはれなる（感慨に耽る）氣色を、（薫の）人々をかしがる。

人のやうにもわび（をつらがつてはゐられなかつたが）給はざりしかど、人ざま（薫の人柄が）のさすが（ずろ）に心苦しう（だが薫は少將のやうに身を入れて姫君の事）（同情を買ふの）

見ゆるなり。（である）薫「うち出で過ぐす事もこそ侍れ。あなかしこ」と（長居は無用）

て立つ程に、「こなたに」と・（て）・召しいづれば、（冷泉院から）（薫は）はしたなき心地す

れど參り給ふ。冷泉「故六條の院（源氏）の踏歌のあした（正月十五日）に、女がたにて遊

びせられける、いと面白かりきと右のおとど（夕霧）の語られし。何事

もかのわたりのさしつぎなるべき人（源氏の後繼者たるべき人は）、難くなりにける（た）世なりや。

いと物の上手なる女さへ（六條院には）多く集まりて、いかにはかなき事も（演奏のやうな事も）を

かしかりけむ」などおぼしやりて（思出話をされて）、御ことども調べさせ給ひて、（冷泉院が彈きものの調子をあはされて）

**此殿**　催馬樂此殿者「此殿はむべもむべも富みけり、さき草の、あはれ、さき草の、はれ、さき草の、三つば四つばの中に殿造りせりや、殿造りせりや」

**歌ごくの物**　細流抄「つけ物也」「樂の曲也」細流抄「歌ごくの物など」は「歌のもので」あつて、歌の添うてゐるものを歌の物といひ、歌の添はぬ曲を曲の物といつたのではなからうか、なほ調査の要がある。

**何事も心もとなく**　御息所は何事もあぶなかしい拙い事のない方のやうだ、御容姿もさぞ美しい事だらう。

**うたて押れ〴〵しう**　恨みがましい事をいつていやになれ〴〵しいといやがられるやうな事はしないが、機會ごとにわが本意の遂げられない歎きをほのめかされるが、御息所はそれを何と思つてゐられたか分らない。

**卯月に女宮**　冷泉院の御息所懷姫の事は去年七月である。

**殊にけざやかなる**　當帝の事ではなく而も女宮であるから格別目立つた御産榮もしないが。

**女宮一所**　弘徽殿の腹。

箏は御息所、琵琶は侍従に賜ふ。和琴を彈かせ給ひて、「此殿」など遊び給ふ。御息所の御ことのね、まだ片なりなる所ありしを、いとよう教へない奉り給ひてけり。今めかしう爪音よく・こて、歌、ごくの物など、上手にいとよく彈き給ふ。何事も心もとなく、おくれたる事は物し給はぬ人なめり、かたち・いとをかしかるべしと、・なほ心とまる。かやうなる折多かれば、おのづからけどほからず見なれ給ふ。うたて狎れ〴〵しうなどは恨みかけねど、折々につけて、思ふ心のたがへる歎かしさをかすむるも、いかが思しけむ、知らずかし。卯月に女宮生れ給ひぬ。殊にけざやかなる、物のはえ・もなきやうなれど、院の御氣色に隨ひて、右の大殿よりはじめて、御産養し給ふ所々多かり。かんの君、つと抱き持ちてうつくしみ給ふに、疾う參り給ふべきよしのみあれば、五十日の程に參り給ひぬ。女・宮一所おはしますに、いと珍らしうつくしうてお





**いと斯からで**　あんなにまでならなくてもよささうなものだ。

**さうじみの**　弘徽殿と御息所。

**殊にかる〴〵しく**　格別仲違ひなさるやうな輕々しい事をなさる譯ではないが。

**さいへど人のこのかみにて**　年は若いが兄だけに中將が豫言された事が事實となつて現れたので。

**斯くいひ〴〵て**　拾遺雜上・同哀傷「世の中をかくいひ〴〵てはて〴〵はいかにやいかにならんとすらん」

**人笑へにはしたなう**　きまりわるい目にあつて物笑ひになるのではなからうか。

**年經てさぶらひ給ふ**　長年宮仕して居られる方々から憎まれて見捨てられたら。

**うちには誠に**　主上は心からお腹立ちで、度々その事を仰せられると人が知らせるので。

**おほやけざまにて**　女官として奉公させようと思つて、玉鬘は尙侍の役を讓られた。

**年頃かうおぼし**　前から玉鬘は辭任を望んでゐたのだが。

はすれば、いといみじう思したり。いとどただこなたにのみおはします。女御・・がたの人々、「いと斯からで・ありぬべき世かな」・と、ただならずいひ思へり。さうじみの御心ども・は、殊にかる〴〵しく背き給ふにはあらねど、さぶらふ人々のなかに、くせ〴〵しき事・も出で來などしつつ、かの中將の君の、さいへど人のこのかみにて、宣ひし事かなひて・、かんの君も、むげに斯くいひ〴〵ての・果いかならむ、人笑へに、はしたなう・こもやもてなされむ、うへの御心ばへは淺からねど、年經てさぶらひ給ふ御方々・、よろしからず思ひ放ち給はば、苦しくもあるべきかな、とおもほすに、うちには誠に物しとおぼしつつ、度々御氣色ありと人の告げ聞ゆれば、煩はしくて、・・・・おほやけざまにてまじらはせ奉らむ事をおぼして、內侍のかみを讓り・・聞え給ふ。おほやけいと難うし給ふことなりければ、年頃かうおぼしおき・しかど、え辭し給はざりしを、故おとどの御

**久しうなりにける**　親が子に讓つた遙か昔の例を勸へた上で。

**この君の**　玉鬘の辭任が長い間聽されなかつたのも、中君が後を繼がれる因縁であつたとも見られる。

**斯くて心やすくて**　玉鬘はかうして中君が心安く宮仕の出來るやうにと思召すにつけ、藏人少將の爲に母北の方がわざ〳〵頼んで來られた時、中君を許しておいてもよいやうにほのめかしておいたのに、宮仕に出たと聞いては、何と思はれるだらう。

**うちより**　主上から中君を尙侍にとの仰言がございますので、姉を院にあげた上に、又妹を尙侍として宮仕させては、無闇に宮仕を好むものとして、世間の聞えもどうかと思つてなやんでゐるのでございます。

**うちの御氣色は**　主上の逆鱗は御尤もと存じます。

**おほやけごとに**　女官としてでも御奉公をなさらない事です。女官といふ事は宜しくないが、女御にはなられなかつたが、せめて女官に參りともの意。

**おとどおはせましかば**　鬚黑存生ならば誰も中君をおさへつけようともなさるまいなど。



して心をおぼして、久しう(く)なりにける昔の例(れい)など引きいでて、その(辭任聽許)事かなひ(給ひ)・・ぬ。この君(中君)の御宿世にて、年頃申し(辭任を)給ひしは難きなりけりと見えたり。斯くて、(中君が)心やすくて・内裏住(うちずみ)もし給へかしと(玉鬘が)おぼすにも、いとほしう、少將の事を、母北の方(少將の母雲居雁)のわざと宣ひしものを、頼め聞えしやうにほのめかし聞えしも、いかに思(〔が〕雲居雁が嗔腹を立てる事だらう)ひ給ふらむ、と(玉鬘が思案にくれる)おぼしあつかふ。(玉鬘の息で中君の兄弟)辨の君して、(素直らしく)心うつくしきや・うに、(夕霧)おとどに聞え給ふ。玉「うちより斯かる仰言の・あれば、(姉を)さま〴〵に(院に妹を尙侍にとそれ〴〵宮仕をさせるのは)あながちなるまじらひの好みと、(外聞を憚つて中君の宮仕を躊躇して居ります)世の聞き耳もいかが・と思う給へてなむ煩ひぬる」と聞え給へば、夕「うちの御氣色は(に)、(姫君を院にあげた事を)おぼし咎むるも、ことわりになむ承る。(中君の宮仕を)おほやけごとにつけても、宮仕し給はぬは、さるまじきわざになむ。はや思し立つべきになむ(な)・」と聞え(申し)給へり。又この度は、(中君の場合には明石中宮の御同意を承つて參られる)中宮の御氣色取りてぞ參り給ふ。おとどおはせましかば・・・・・・(后と聞ゆとも必ず)壓し消ち給はざらまし、など、(玉鬘はいろ〳〵感慨に耽られる)あはれなる事(のみ)どもをなむ。(院參の大君)姉君は、かた



**なま心ゆかぬ**　主上は不滿足に思召したが。

**かた〴〵に**　宮仕に出た二人の人達の世話の燒ける間は、おつとめをなさるにもお心が落着かないでせう。

**うちには**　玉鬘が禁中に居る尙侍の所へ。

**さるべき折も**　何か用事のある時でも院には參らなかつた。

**古へを思ひ出でしが**　昔自分が院の思召に背いて鬚黑の妻になつた事を思ひ出してそれが勿體なさに、そのお詫びの積りで、皆の反對を知らないふりして姫君を宮仕に差上げて、其上自分までが、假初にも若々しい浮いた評判があつたとしたら、誠に世間に顔向けもならず見苦しい事だらう。

**さる忌によりと**　言つてさうした事（院の御懸想）を避ける爲に院へは參らないのだとは御息所にも打明けられないので。



ちなど(も)・名高うをかしげなり(る)と(主上が)聞召しおきたりけるを、引きた(入内させずに)がへ給へるを(院參させた事を)、なま心ゆかぬやうなれど、これもいとらう〳〵(中君も氣轉もあり)じく、心にくくもてなしてさぶらひ給ふ。

(玉鬘)さきのかんの君、かたちをかへてむと(出家を決心されたが)思し立つを、君達(大君中君)「かた〳〵にあつかひ聞え給ふ程に、行ひ(勤行)も心あわただしうこそ思されめ。今すこしいづ方も心のどかに(大君も中君も落着かれた所を見屆けた上で)見奉りなし給ひて、もどかしき(氣をもむことなく)所なく、ひたみちに(專心に)勤め給へ」と君だち(中將や辨などが)の申し給へば、おぼしと(玉鬘が出家を躊躇して)どこほりて、うちには時々忍びて參り給ふ折もあり。院(冷泉院)には、(玉鬘に對する厄介な懸想心)煩はしき御心ばへの猶(々)・絶えねば、さるべき折(々)・も更に參り給(玉鬘が院には)はず。古へを思ひ出(以下玉鬘の心中)でしが、さすがに忝う(く)おぼえしかしこまりに、人の皆ゆるさぬ事に((ら)姫君を院にあげた事)思へりしをも、知らずがほに思ひて參らせ奉りて、みづからさへ、たはぶれにても、若々しきことの世に聞えたらむこそ、いとまばゆく見苦しかるべけれ(らめ・)・と思せ・・ど・、さる忌(いみ)により(は)と・、はた御息所にもあらはし聞え給はねば、

**我を昔より** 母の心中を知らずに大君が恨むのである。故大臣は昔から自分を特別愛して下さつたが。

**はたまして** と言つて院の上とても、玉鬘が一向院に寄りつかないので。

**古めかしきあたりに** 母上があなたを私のやうな老人の所へ追拂つてしまつて、輕蔑して寄りつきもなさらぬのも尤もです。

**年頃ありて** 數年たつて御息所は又皇子をお生みになつた。

**今宮** 今度誕生の若宮。

**おりゐ給はぬ** これが御在位中の事であつたらどんなに張合があつたらう。

**女一の宮** 弘徽殿の腹。

**斯くさま〴〵** 女一宮と若宮とそれ〴〵にかはいゝ方が引續いてお生れになつたので。

**珍らかなる方にて** 珍らしいといふ點でこの御息所を取分け御寵愛遊ばすので、女御も、かうまであまり御寵愛遊ばすのは面白くない事と、御心が動搖し始めた。

（以下御息所心中）我を昔より、故おとど（髭黒）は取り分きておぼしかしづき、かんの君（母上（玉鬘）は櫻の爭や其他一寸した事の折にも妹の肩を持つてゐられた心持が今も續いて）は、若君を、櫻の爭ひ、はかなき折にも、心寄せ給ひし名殘に、おぼしおとしける（自分を中君より輕く見てゐられるのだ）よ、と怨めしう思ひ聞え給へ（ひ）り（け）。院のうへ（冷泉院）、はたましていみじうつらし（玉鬘を）とぞ思し宣はせける。（冷泉）「古（ふる）めかしきあたりにさし放ちて（玉鬘が大君を）、思ひおとさるるもことわりなり」と打語らひ給ひて、あはれに（ます〳〵御息所をいとしがられる）のみおぼしまさる。年頃ありて又男御子（みこ）生み給ひつ。そこらさぶらひ給ふ御かたがた（多くの后妃達に今迄皇子誕生の事もなかつたのに）に、斯かる事なくて年頃になりにけるを、おろかならざりけ（か）る御宿世（深い前世の因縁だなどと）など、世人おどろく。御門（冷泉院）はまして限りなう（く）珍らしと、この今宮をば思ひ聞え給へり。おりゐ給はぬ世ならましかば、いかにかひあらまし、今は（讓位の今は）何事もはえなき世を、いと口惜しとなむ思しける。女一の宮を限りなきものに思ひ聞えたまひ（院が）しを、斯くさま〴〵（に）うつくしうてかず添ひ給へれば、珍らか（今迄無かつた）なる方にて（皇子御誕生などいふ事のある點で）、いと（心）殊に（もてなし）おぼいたるをなむ、女御（弘徽殿）も、



**世の事として** 世の常として、しも〴〵の家庭でも、何の事情も知らぬ一般の人は、初から理窟の通つてゐる本妻の方に味方をするもののやうだから。

**あしうやは** 私共の諫めたのはわるい事ではなかつたのです。

**斯からで** 私のやうに苦勞せずに暢氣に人前もよくて。

**限りなき** よほど幸運に生れた人でなければ、宮仕などを思ひ立つべき譯のものではなかつた。

**聞えし人々** 藏人少將を初として御息所に懸想した人々。

**さてもおはせましに** 姫君の婿としても見苦しくない人々が多かつた。

あまりかう（く）までは物しからむ、と御心（ぞ）動きける。事に觸れて、安からずくね〴〵しき（腹立たしくひねくれがましい事が）事出で來などして、おのづから御中も隔（女御と御息所と）たるべかめり。世の事として、かずならぬ人の中らひにも、もとよりことわり（は）得たる方にこそ、あいなきおほよそ（う）の人も、心を寄するわざなめれば、院（冷泉院）のうちの上下（かみしも）の人々、いとやんごとなくて（女御として年久しくなられる弘徽殿にはかり）久しくなり給へる御方にのみことわりて（理窟をつけて）、はかなき事にも、この御方ざま（御息所の方を）を、よからず取りなしなどするを、御せう（中將や辨）との君だちも、「さればよ、あしう（く）やは聞えおきける」と、いとど申し給ふ（玉鬘に）。心やすからず（玉鬘は不愉快でもあり）聞きぐるしきままに、（玉）「斯から（く）で、のどやかにめやすくて世を過ぐす人も多かめりかし。限りなきさいはひなく（ら）て、宮仕の筋は、思ひ寄るまじきわざなりけり」と、大うへ（玉鬘）は歎き給ふ。聞え（給ひ）し人々の、めやすくなり（順々に出世して人前もよくなつて）のぼりつつ、さてもおはせましに、かたはならぬぞあまたあるや。そのなかに源侍從（薫）とて、

**ひはづ**　弱々しい。纖弱。

**匂ふや薫るや**　匂宮よ薫君よと並べて。

**そのかみは**　娘を望んでゐられた頃は、若くて頼りないやうだつたが、年と共にお立派になられるやうだ。

**かたちさへ**　あの頃から容姿まで申分のない方だつた。

**なま心わろき**　多少意地のわるい女房達は騒ぎつつ。

**うるさげなる**　あんな面倒な宮仕よりは少將にお許しになつたらよかつたに。

**なほ思ひそめてし**　思ひそめた玉鬘の姫君の事が今も諦められなくて。

**道のはてなる**　新古今戀一讀人知らず「東路の道のはてなる常陸帶のかごとばかりもあはむとぞ思ふ」姫君にあひたいの意である。

いと若うひはづ・・なりと見しは、宰相の中將にて、「匂ふや薫るや」と、・・聞きにくくめでさわがるなる。げにいと人がらおもりかに心にくきを、やんごとなき親王たち大臣の、御むすめを志ありて宣ふなるなども、聞き入れずなどあるにつけて、「そのかみは若う心もとなきやうなりしかど、めやすくねびまさりぬべかめり」など、いひおはさうず。少將なりしも、三位の中將とかいひて、覺えあり。「かたちさへあらまほしかりきや」など、なま心わろきつかうまつり人は、打忍びつつ、「うるさげなる御有樣よりは」などいふもありて、いとほしうぞ見えし。この中將は、なほ思ひそめてし心・絶えず、憂くもつらくも思ひつつ、左大臣の御むすめを得たれど、をさをさ心もとめ・ず、「道のはてなる常陸帶の」と、手習にも言種にもするは、いかに思ふやうのあるにかありけむ。御息所、安げなき世のむつかしさに、里がちになり給ひにけり。かんの君、思ひしやうにはあ





**うちの君**　禁中に居る尙侍の君で玉鬘の中君。

**右は左に**　夕霧右大臣は左大臣となり。

**よろこびし給へる**　加階の悅びをした人々は何れも夕霧の一族でこの一族以外には人のないやうな時勢であつた。

**中納言の御よろこびに**　薫は加階のお禮參りに玉鬘の所へ參つた。

**斯くいと草深く**　かうして日ましに草深くさびれてゆく私の家を素通りもなさらずにお立寄り下さる御深切につけても。

**ふりがたくも**　いつまでもお若い事だ、かうだから冷泉院はいつ迄もこの人の事をお忘れにならないのだ、そのうちに何か事件が起るかも知れない。

らぬ御有樣を、口惜しとおぼす。うちの君は、なか〳〵今めかしう心やすげにもてなして、世にも故あり心にくき覺えにてさぶらひ給ふ。・・左大臣亡せ給ひて、右は左に、藤大納言、左大將かけ給へる右大臣になり給ふ。次々の人々なりあがりて、この薫中將は中納言に、三位の君は宰相になりて、よろこびし給へる人々・・・・・・、この・・御族よりほかに・・人・・なき頃ほひになむありける。中納言の御よろこびに、さきの內侍のかんの君・・に參り給へり。おまへの庭にて拜し奉り給ふ。かんの君對面し給ひて、・・「斯くいと草深くなりゆく葎の門を、よぎ給はぬ御心ばへにも、まづ昔の御事思ひ・・出でられて・・なむ」など聞え給ふ御聲の、あてに愛敬づき、聞かまほしう今めきたり。ふりがたくもおはするかな、斯かれば院のうへは、怨み給ふ御心絶えぬぞかし、今遂に、事引きいで給ひてむ、と思ふ。

**よろこびなどは**　今度の昇進などはさして何とも思つては居ないのですが、何をおいてもお目に懸りたくて參つたのです。**よぎぬなど**　素通りしないで、など仰しやるのは、私の御無沙汰致しましたのにあてつけて仰しやいますのでせうか。**今日はさだすぎにたる**　こんなお目出たい日に、年寄の泣言など申上げる場合でもないと御遠慮申して居りますが、わざ〳〵お訪ね下さる事はむつかしい事でせうから、と申して御目にかかる事が叶はなければ、いかに厚かましくても、かうしたくだしいお話も出來ませんので。**女御を頼み聞え**　女御を力にし又后宮も御同情して下さる事とし思つてゐましたのに、お二人とも、あの人を無禮な許せぬ女だと思つてゐられるらしいので。**宮たち**　御息所腹の女二宮と今度誕生の若宮。**斯くて心やすくだに**　苦勞は絶えないながらも、里下りしてせめては氣がねなさらないやうにとお暇を戴かせたのですが。**とざまかうざまに**　女御や皆様をお力に宮仕させまして、その當座はどなたにも心やすく打併けてお力になつて戴いて居りましたが、今はかうした間違が起つて見ますと、考の幼稚な私が身分不相應な宮仕などを思ひ立つたのが、自分ながらいやになります。

---

薫「よろこびなどは、心にはいとしも思う給へねども、まづ御覽ぜられにこそ參り侍れ。『よぎぬ』（玉鬘の詞）など宣はするは、おろかなる罪に、うちかへ（かうがへイ）させ給ふにや」と申し給ふ。玉「今日は、さだすぎにたる身のうれへなど、聞ゆべきついでにもあらずとつつみ侍れど、わざと立寄り給はむことは難きを、たいめんなくてはた、さすがにくだ〳〵しき事になむ。院にさぶらはるるが（御息所が宮仕の上で大變苦勞致しまして）、いといたう世の中を思ひ亂れ、中空なるやうにただよふを（どうしたらよからうかと身の處置に迷つてゐるのですが）、女御（弘徽殿）を頼み聞え、又后の宮（秋好中宮）の御方にも、さりとも思し許されなむ（いくら何でも勘辨して下さるだらうと）と思ひ給へ過ぐすに、いづ方にも（女御も后宮も御息所を）なめげに許さぬものにおぼされためれば、いと傍痛くて、宮たち（若宮達は其儘院にお殘し申して）はさてさぶらひ給ふ、このいとまじらひにくげなるみづから（院に居づらさうな御息所御自身は）は、斯くて心やすくだに眺め過ぐい給へとて、まかでさせたる（里に）を、それにつけても、聞きにくく（聞きづらい評判が）なむ（あります）。うへにもよろしからず思し宣はすなる（院も里居を宜しからず）。ついであらば、ほのめかし奏し給へ（よろしくお取りなし下さい）。とざまかうざまに、頼もしく思ひ給ひて、





**斯かる御まじらひの**　宮仕といふものに不安の伴なふ事は昔からきまつた事になつて居りますが。**誰も打解け給へる**　后や女御達何れも表面は打解けて仲よくしてゐられるやうですが、内々の競争心はどうしてお捨てになる事が出來ませう。**人は何の咎と見ぬ**　他人から見ては何もわるくない事でも、御當の人に取つては恨めしくて、わけのない事にも氣をまはされるのが。**さばかりの**　それ位のいざこざも豫期せずに宮仕を思ひ立たれたのでせうか。**對面のついでに**　お目に懸つた折に泣言を聞いて頂かうとお待ちうけ申して居つたかひもなく、あつさりした御裁判でございますね。男の知つた事でないと、ごく簡單に斷つてしまつた事をいふ。

---

出だし立て（宮仕に）侍りし程は、いづ方をも心やすく打解け頼み聞えしかど、今は斯かること（女御や后宮などから悩まれてゐる事）あやまりに、をさなうおほけなかりけるみづからの心を、もどかしく（非難したい氣になる）なむ」と、うちなげい給ふ氣色なり（簾の外からの想像）。薫「更にかうまでおぼすまじき事になむ（そんなにまで御心配には及びませぬ）。斯かる御まじらひの安からぬことは、昔よりさる事となり侍りにけるを、位を去りて（院が帝位を）靜かにおはしまし、何事もけざやかならぬ（萬事晴れだたぬやうになりましたので）御有様となりにたるに、誰も打解け給へるやうなれど、おのおののうち〳〵には、いかが挑ましくもおぼす事もなからむ。人は何の咎と見ぬことも、わが御身に取りては恨めしくなむ、あいなき事に心を動かし給ふこと、女御、后の常の御癖なるべし。さばかりの紛れもあらじものとてやは思し立ちけむ。只なだらかにもてなして（穩かにして我慢なさるのが宜しうございます）、御覽じ過ぐすべき事になむ侍るなり。男の私がこの方にて、奏すべき事にも侍らぬことになむ」と、いとすく〳〵しう（にべもなく）申し給へば、玉「對面のついでにうれへ聞えむと、

**人の親にて**　人の親として何かと切りもりしてゐられるわりに若々しい大やうな感じのする方だと薫は思ふ。

**かうざま**　玉鬘と同じやうに若やかにおほどいたる事をいふ。

**こなたかなた**　二人の姫君（御息所と尚侍）があちこちと別れて住んでゐられて、邸内一帯長閑で氣の散る事もないから、薫は姫君達のゐられる御簾の内さへ氣恥かしいやうで。一體に來客もなく長閑で他に氣の散ることがなく、自然姫君達の注意が一人に集るわけだから、御簾の奧が氣恥かしく思はれるので。

**近うも見ましかば**　薫を娘の婿にすればよかつたと。

**大臣殿は**　紅梅右大臣家は。

**大饗の垣下の**　紅梅の任大臣の大饗に相伴役の君達などが大勢集まつて來られた。

**左のおほい殿**　夕霧。

**還饗**　かへりあるじに同。三六三頁。

**心にくくもてかしづき**　右大臣が深窓に傅き育ててゐられる姫君を、特に宮にと、熱心に望んでゐられるらしいが、どうしたものか、宮は更に氣にもおとめにならなかつた。「さるは」は下文の「御心もとめ給はざりける」をさして「それでも」といつたのである。

待ちつけ奉りたるかひもなく、あはの御ことわりや」と、打笑ひておはする。人の親にてはかばかしがり給へる程よりは、いと若やかにおほどいたる心地す。御息所もかやうにぞおはすべかめる、宇治の姫君の心とまりておぼゆるも、かうざまなるけはひのをかしきぞかし、と思ひ居給へり。内侍のかみも、此頃里にまかで給へり。こなたかなた住み給へるけはひをかしく、大方のどやかに紛るることなき御有様どもの、簾の内心恥かしう覺ゆれば、心づかひせられて、いとどもてしづめめやすきを、大うへは、近うも見ましかばと、うちおぼしけり。大臣殿は、ただこの殿のひんがしなりけり。大饗の垣下の君だちなど、あまたつどひ給ふ。兵部卿の宮、左のおほい殿の賭弓の還饗、相撲の饗應などにはおはしましを思ひて、今日の光と請じ奉り給ひけれど、おはしまさず。心にくくもてかしづき給ふ姫君達を、さるは志ことに、いかでかと思ひ聞え給ふ





**隣**　紅梅右大臣家の事。

**昔のこと**　玉鬘の心に鬚黑生前の事が思ひ浮んで。

**故宮亡せ給ひて**　故宮の薨後間もなくあの大臣が今の北方の所へお通ひになつた事を、大層輕々しいやうに世間では非難して居りましたが。

**さすがさる方に**　それはそれでさすがに見苦しくもない事でした。

**定めなの世や**　非難された夫婦が繁昌してゐるのにわが姫君の不遇である事を思ひ合せたのである。

**おほやけの**　お上が人數の中に入れて昇進させて下さつたけれども私は嬉しいとも思ひませぬ。

**私の**　思ひの儘にならぬ私向の歎きが、年月と共に忘れられませぬ。

べかめれど、宮ぞ、いかなるにかあらむ、御心もとめ給はざりける。源中納言の、いとどあらまほしうねびととのひ、何事もおくれたる方なく物し給ふを、おとども北の方も、目とどめ給ひけり。

隣の斯くののしりて、行きちがふ車のおと、さき追ふ聲々も、昔のこと思ひ出でられて、この殿には、物あはれに眺め給ふ。

玉「故宮亡せ給ひて、程もなく、このおとどの通ひ給ひし事を、いとあはつけいやうに世人はもどくなりしかど、思ひも消えず斯くて物し給ふも、さすがさる方にめやすかりけり。定めなの世や。いづれにか寄るべき」など宣ふ。

左の大殿の宰相の中將、大饗の又の日、夕つけてここに參り給へり。御息所里におはすると思ふに、いとど心げさう添ひて、

中將「おほやけのかずまへ給ふよろこびなどは、何とも覺え侍らず。私の思ふことかなはぬ歎きのみ、年月に添へて、思う給へはる

**見ぐるしの君だちの**　この人は世が思ふ儘になるのにつけあがつて、官位をも何とも思はずに、暮していらつしやる、見苦しいことだ。

**故殿おはせましかば**　故殿が御存生だつたら、内の子供達も官位の昇進などもどしいとは思はずに、かうした氣まぐれ遊びに氣苦勞して居つた事でせう。

**年よはひの程は**　年齢のわりには地位は見苦しくもないが、人よりは昇進が遲いと母君は歎いてゐられる。

宰相中將。

**宰相とかくつき〴〵しく**　なにやらかやらと機會をとらへては、御息所に對して適當に思ひを運んでゐる。

けむ方なきこと」と、涙おしのごふも、殊更(わざとらしい)めい(き)たり。二十七(宰相中將の事)八の程の、いと盛りに匂ひ・・(多く)、花やかなるかたちし給へり。玉「・・・(斯くのみ)見ぐるしの君だちの(き)(宰相中將をさしていふ)、世の中を心のままにおごりて、官(つかさ)位をば何とも思は・(へら)ず過ぐしいますがらふや。故殿(鬚黒)おはせましかば、ここなる人々も(玉鬘の三人の子息)、斯かるすさびごとに・・(つけて)ぞ心は亂らまし」と・(て)、うちなげき給ふ・・(ひぬ)。右兵衛の督(以下侍從と三人皆玉鬘の息)、右大辨にて、皆非參議なるを、うれはしとおもへ・(ほした)り。侍從と聞ゆめり・・(いひこ)しぞ(そ)この頃頭の中將と聞ゆる。年よはひの程は・・(いと)かたはならねど(ほ)、人におくると・・(思ひ)歎き給へり・・(とぞ)。宰相はとかくつき〴〵しく。

納本

昭和二十七年七月二十日　印刷
昭和二十七年七月二十五日　發行

校對 源氏物語新釋 巻四
都内定価 六〇〇円
地方定価 六二〇円

著者 吉澤義則
發行者 下中彌三郎
東京都千代田區四番町四
印刷者 塩原康人
東京都千代田區四番町四

株式會社 平凡社
東京都千代田區四番町四
電話九段(33)四八八二―四番
四八九五―六番

東京・神田神保町三の一〇 共立社印刷所